『我らの一人』論：〈意識のドラマ〉としての内容と形式について

―― 時間の観点からの一考察

桝田　隆宏
（高知大学人文学部欧米文化コース）

(A Study of *One of Ours*: On its Content and Form as a Drama of Conscious ―― An Analysis from the Viewpoint of Time)

Takahiro Masuda
(*Western Cultures*)

(I)

キャザーは評論集『40歳以下でなく』(1936) の序文の中で、「世界は1922年か、その当たりで二つに分裂した。そして、この書に収めた小品の中で思い起こされている人物や偏見は、過去七千年の世界に属するものとなった……これらの小品は後ろ向きの人々の為に、その仲間の一人によって書かれたものである」[1] と述べている。この言葉は第一次大戦後のアメリカ社会に対するキャザーの幻滅と絶望を表明するものであり、彼女の時間観と世界観が1922年当たりで完全に逆転したことを意味するものである。事実、現実のアメリカ社会を正視して書かれたキャザーの1922年以降の小説は全て、「破壊」としての時間の重荷を軸に、開拓者世界の敗北と崩壊を描くアメリカの悲劇である。というのも、彼女は人生に夢とロマンを求める非凡な時間の肯定者を広く開拓者と呼び、彼らの生き方を人間の理想として、開拓者世界の興亡の歴史を描き続けた作家だからである。

ここで、キャザー文学の展開を思い見る時、第一次大戦が彼女の時間観と世界観に決定的な影響を与えているのは間違いのない事実である。なぜなら、大戦前に書かれた『おお、開拓者たちよ！』(1913) が新大陸の辺境と人間の未来を絶賛しているのに対して、大戦中に書かれた『私のアントニーア』(1918) はノスタルジックな時の重荷で縁取られ、後ろ向きに時間を讃えているからであり、また大戦後に書かれた彼女の一連の小説は、近代アメリカ社会に於ける時間の重荷を悲劇的に描いているからである。言い換えれば、時間に捉われた作家キャザーの文学は、彼女の時間観の変遷を忠実に反映しながら、大戦前の〈叙事詩的作品〉から戦時下の〈牧歌的作品〉を経て、大戦後の〈風刺的作品〉へと展開[2] してゆくのである。この展開は古典文学の愛好者であったキャザーには極めて相応しいものと言えようが、彼女の描いたアメリカの悲劇が風刺に貫かれているのは、開拓者が徹底した時間の肯定者であるのに対して、彼らの生きるアメリカ社会にもはや時間の意義は存在しないからである。換言すれば、時間の正体が「破壊」でしかない暗黒の世界で、時間を肯定するところに風刺が生じるのは必然であり、その行き着く先は如何なる形であろうと、悲劇以外にあり得ないのは自明である。第一次大戦が始まって以来、キャザーは手紙や会話の中で「私たちの現在は破滅しているが ―― しかし、私たちには美しい過去があった」[3] と繰り返し述べたと言われている。その第一次大戦を背景として、近代アメリカ社会の悲劇を描いた彼女の最初の風刺小説が『我らの一人』(1922) である。

この作品はキャザーが唱える「家具を取り払った小説」[4] の理論に最も反する写実的な長編小説であり、また評者によっても不当に酷評され、無視されてきた[5]。正直言って、『我らの一人』は彼女の大作と比べれば、技法的には見劣りするところがあるのは事実である。とはいえ、ここで改めて彼女の文学の展開を振り返る時、この小説をマイナーな作品として考察の対象から外すことは出来なくなる。というのも、『我らの一人』はキャザーの時間観と世界観をペシミズム一色に決定づけた、第一次大戦後のアメリカ社会の現実を見据えた上で書き上げられ、問題の1922年に出版された作品であり、彼女が描いた一連のアメリカの悲劇の出発点に位置しているからである。つまり、『我らの一人』はキャザー文学の一つの重要な展開点を成す作品であり、この小説を無視して作家キャザーとその文学の核心に迫ることは出来ないのである。従って、「芸術的に見れば、『我らの一人』はキャザーの小説の中で最も不出来なものに属するが、しかし、内容とテーマの観点から言えば、通常認識されている以上に意義のある作品である」[6] というマックファーランドの指摘は、まさに正鵠を射たものと言えよう。

小説は全５巻から構成され、その内容はネブラスカの辺境開拓地と人間、延てはアメリカ社会の変貌を背景に、第一次大戦で戦死したキャザーの若い従弟[7] をモデルとして、その精神の遍歴を描いた〈意識のドラマ〉である。彼女が主人公の名前をクロード・ウィーラーとしているのは極めて暗示的である。というのも、彼の名前のイニシャルを逆にすれば、W. C.（作者の名前のイニシャル）となるからである。つまり、ネブラスカの辺境と人間の変貌に対するクロードの〈幻滅〉は、紛れもなくキャザー自身と同じものであるのに対して、第一次大戦に対する最終的な評価に関しては、両者の立場は正反対であることを意味するものである。キャザーは大戦の当初から「この戦争が彼女にとって非常に大切な、精神的努力の世界に属する全てのものに脅威を与えるものだ」[8] と心を痛め、加えて、戦後のアメリカ社会を直視することによって、自己の世界観と時間観を決定づけられた人間である。従って、第一次大戦を正真正銘の聖戦と信じ、その参戦に人生の生き甲斐を見出すクロードの思いは、彼女にとって、救い難い〈幻想〉以外の何ものでもなかったのは自明である。キャザーの風刺の力点は飽くまでもクロードを取り巻く外部世界にあるとしても、彼女が主人公の名前に語源的には "lame" を意味する Claude を採用し、それを作品の中で意識的に "clod"（間抜け）と結び付けているのは意味のないことではあるまい。本稿の目的は『我らの一人』をアメリカの悲劇を描く意識のドラマと捉え、その形式と内容を時間の観点から探ることにある。クロードが嵌る四つの罠を軸に論を進めたい。というのも、彼は新しい時代の中で人生に夢を求めて、模索するロマンティストであるが、この若者を捕らえて殺す悲劇の世界を具象的に象徴するには、罠のイメージが最も相応しいと言えるからである。第一巻から第三巻まではネブラスカを、第四巻はアメリカからフランスに向かう大西洋の航海を、第五巻は戦時下のフランスと大戦後のアメリカ、特に、クロードの故郷を舞台とし、全編を通して語るのは第三人称の語り手（以下簡単に語り手と呼ぶ）である。では、第一巻の「ラヴリー川の辺で」（1912年８月－1914年２月）から見てみよう。

（II）

物語はネブラスカの片田舎を舞台に、クロードの10代（彼の誕生日は９月15日頃と推測される）が殆ど終わろうとしている、ある夏の８月から始まる。その片田舎の地名と物語が始まる年を作者は意図的に明らかにはしていないが、作品を綿密に通読すれば、その年は西暦1912年であり、舞台はアレグザンドラやアントニーアが輝かしい勝利と栄光を収めた辺境開拓地、ディヴァイドであるのは自明である。そのディヴァイドを流れるプラット川が作品の中でラヴリー（"lovely"）川と名付けられているところに作者の風刺がある。というのも、ディヴァイドに対するキャザーの評価は、前作の『私のアントニーア』と本作品では完全に逆転しているからである。作品に則して言えば、

1890年代の前半に生まれ、アントニーアの次の世代に属するクロードにとって、故郷（以下はディヴァイドとも呼ぶ）は幻滅と挫折の舞台であり、ラヴリー川の辺で彼が口にするのは不満と慨嘆の声のみである。「ラヴリー川の辺で彼と友人のアーネストは座り込んで、歴史の本が終末に来たこと、世界が貪欲極まり無い老齢に達し、高貴な企てが永遠に失われてしまったことを共に嘆き悲しんだものであった」(p. 219)[9] という語り手の言葉は、その一つの証左である。では、クロードと彼を取り巻く外部世界について具体的に見てみよう。

キャザーはクロードを「理想主義者」(p. 181) と呼んでいるが、この若者と彼女の描いた精神の開拓者たち、中でも分身的人物であるバートレイ・アレグザンダー（『アレグザンダーの橋』[1912] の主人公）やゴッドフリー・ナポレオン・セントピーター（『教授の家』[1925] の主人公）との間に顕著な共通点が見られるのは確かである。先ず第一に、学生時代のバートレイ（彼の少年時代は描かれていない）はベルクソンの言う「衝動の人」[10]、換言すれば、極端な「行動の人」であるが、クロードもまた本質的に同じタイプの人間である。語り手は「気性の激しさと絶えず動き回らずにはおれないというのが、クロードの少年時代の一番目立った特徴であった」(p. 26) と述べている。次に、バートレイもセントピーターも徹底的に死に逆らい、生を肯定するエロス的人間であるが、クロードも全く同様である。「(14歳から18歳迄の) クロードは死の恐ろしさを激しく体で感じるのであった。何百万という人々が一人寂しく地下で朽ち果ててゆくことに彼が思いを馳せた時、人生とは人々を捕らえて一つの恐ろしい終末に送り込む罠以外の何ものでもないように見えた。死から逃れ得たようなそれほど力強い、あるいは善良な人は未だかつて一人もいない。しかしながら、時々、彼は自分クロード・ウィーラーこそ、死から逃れて見せるのだと固く信じた —— 死から自分自身を助け出す為の、何か巧妙な策を現実に考え出してやろうと思った」(p. 45) という語り手の言葉は、その明白な証左である。第三に、キャザーの信念を具現するセントピーター[11]は近代アメリカ社会の物質主義に徹底して背を向け、「精神、想像力のロマンス」[12] に生きることを人間の理想と考える人物であるが、クロードもまた作者の分身を兼ねている限りに於ては、同じ範疇に属する人間である。彼は精神的な豊かさを第一として、物質主義と機械への隷属を断固拒否し、人生に夢とロマンを求める若者である。それは次の言葉に明らかである。

(1) Sometimes he thought this security [which was brought by money] was what was the matter with everybody; that only perfect safety was required to kill all the best qualities in people and develop the mean ones. (p. 89)
（このお金による保証が全ての人間の関心事であり、これこそが人間の崇高な品性を台無しにし、卑しい根性を増長させるものだとクロードは時々思った。）

(2) Machines, Claude decided, could not make pleasure, whatever else they could do. They could not make agreeable people, either. (p. 39)
（機械は他のなんでも出来るかもしれないが、喜びを作り出すことは出来ないとクロードは結論した。機械は感じの良い人たちを作り出すことも勿論できない。）

(3) "Well, if we've only got once to live, it seems like there ought to be something--well, something splendid about life, sometimes." (p. 48)
（「我々がたった一度しか生きられないものなら、当然何かそこにあっていいように思えるのだが —— 時々は、人生の何か素晴らしいことが。」）

簡潔に言えば、クロードは新しい時代の中で「人生の何か素晴らしいこと」を、熾烈に希求するエロス的な「理想主義者」である。では次に、この若者を取り巻く外部世界を見てみよう。

彼は富裕なウィーラー家の次男であり、ネブラスカの州都リンカーンにある一プロテスタント系の大学で学ぶ学生である。しかし、故郷も大学もまた家族ですらも、係われば係わる程、彼を失望

させ、幻滅させるだけである。家族から見てみる。クロードの家族は父、母、兄、弟、それに手伝い女の6人から成る。父のナットは「インディアンや野牛が未だいる頃に、ネブラスカのこの地方にやって来た」(p. 7) メイン州からの移住者であり、開拓農民から大農場主となった成功者であるが、近隣の人々からは "land hog" (p. 71) と呼ばれる「土地貪欲漢」である。次に、母親のイヴァンジェリンは、新しい時代の中で生き甲斐のある人生を渇望して苦しむクロードに最大の関心と愛情を示しながらも、どうすることも出来ない無力な人間である。というのも、彼女はこの最愛の息子の力となるには「余りにも信心深くて、人生には無知」(p. 24) であり、加えて、家庭の主導権は完全に亭主関白の夫に握られているからである。第三に、兄のベイリスは未だ三十前の独身であるが、フランクフォート（レッド・クラウドの変名）の町で農機具商を営み、既に相当な金銭的成功を収めた商人である。しかし、彼はクロードが最も嫌悪する偏狭で俗悪な実利主義者である。第四に、弟のラルフはベイリス程の悪党ではないとしても、母や手伝い女を苦しめる新製品の機械を次から次へと買い込む偏執的な機械狂である。第五に、手伝い女のマヘイリーはクロードの母と共に彼の最大の味方であり、聖書の「幸いなるかな、柔和なる者よ……」[13] を連想させる善女ではあるが、文盲で知恵遅れの老女である。

ここで、クロードの家族の中に秘められた象徴的意味について具体的に見てみたい。先ず第一に、キャザーの言う新しい時代とはマモンの神と機械を崇拝する物質主義の時代であることを思う時、ウィーラー家に於ける上記の三人の男性たちが、新しい時代の醜い特質を象徴的に代表する人物として描かれているのは疑いのない事実である。つまり、父のナットは物欲の、兄のベイリスは金銭欲の、弟のラルフは機械の「奴隷」(p. 71) であると言えよう。ただ、本作品はキャザーの悲劇的な時間観と世界観を反映する最初の小説であり、しかも、故郷のネブラスカに住む親類の戦没者遺族をモデルとしているが故に、作者の風刺は後の作品ほどには辛辣であからさまではないことを指摘しておきたい。

次に、父のナット・ウィーラーはディヴァイドの開拓を成し遂げた成功者の一人であり、その点に関しては、アレグザンドラやアントニーアと比べて遜色のない人物である。にもかかわらず、彼は両ヒロインの偉大さとは全く無縁の卑小な人物として描かれている。これは一体何故であろうか。確実に言えることは、キャザーにとって、ディヴァイドの開拓者世界とは、アレグザンドラやアントニーアのような母性豊かな女性が主役を務める女の世界であり、またそうでなければならない[14]ということである。従って、この世界の実権が女から男に移り、しかも、その男が女の上に君臨する時、そこはもはや楽園ではなく、悲劇的な闇の世界でしかないのである。これはキャザー文学に秘められた一つの重要な特質である。作者は幼いクロードを憤激させた一つの挿話をさりげなく物語の中に挿入しているが、この挿話の内容こそ、その確かな証左である。具体的に見てみよう。

それはクロードが5歳の時の出来事である。彼は母が父に果樹園に行ってサクランボを取ってきてくれるようにと頼んでいるのを耳にした。というのも、彼の母は背中に慢性の痛みを抱える小柄な女性であるが、父は頑健な大男であるからである。程無くして父が果樹園から戻り、「サクランボでもう困ることはないよ。お前とクロードで行って簡単に取れるよ」(p. 25) と陽気に母に告げたので、二人は喜々として果樹園へと出掛けたが、そこでこの親子が見たものは「決して忘れることの出来ない光景」(p. 26) であった。語り手は「緑の葉と赤い実が一杯実った、あの美しい、頂が丸みをおびた、サクランボの木を —— 彼の父がノコギリで切り倒してしまったのだ！それは未だ生々しい切り株のそばに転がっていた。大きな叫び声を上げるとクロードは小さな悪魔のようになった」(p. 26) と述べている。アレグザンドラやアントニーアが豊かな〈生〉の創造者であるとするなら、ナットはその冷酷な破壊者であると言えよう。ウィーラー農場では男が主役で、女が脇役であり、しかも、その男（ナット）が病気を嘲笑う大男であるのに対して、彼の妻が慢性の病に

苦しむ小柄な女性として設定されているのは決して意味のないことではあるまい。このナットの下で働くのは「この地方きっての粗野で下劣な二人の雇い男」(p. 4) であり、またその男の一人に虐待されて苦悶するのは「忠実な老いた雌馬」(p. 4) であることを指摘しておく。ディヴァイドの変貌に対するキャザーの幻滅は、かくまでに深く救いのないものであったのである。というのも、ディヴァイドの広大な一角を占め、本作品の主人公が生まれ育ったウィーラー農場は、そもそもその始原の時から本質的には闇の世界であったからである。従って、『私のアントニーア』が新大陸（ディヴァイド）に於ける楽園の創造を描く時間のドラマとするなら、『我らの一人』はその楽園が崩壊した後のアメリカの悲劇を描く時間のドラマであると言えよう。『我らの一人』が『私のアントニーア』を出版した年に書き始められた事実[15]を思い見る時、キャザーの意識の中で演じられた輝かしいディヴァイドの栄光のドラマは、流れ星の光芒のごとく、余りにも短いものであったと言えよう。では次に、デイヴァイドの変貌を慨嘆する作者の分身、クロードの声を聞いてみよう。それは次のように述べられている。

> Claude felt sure that when he was a little boy and all the neighbours were poor, they and their houses and farms had more individuality . . . . With prosperity came a kind of callousness; everybody wanted to destroy the old things they used to take pride in. The orchards, which had been nursed and tended so carefully twenty years ago, where now left to die of neglect. It was less trouble to run into town in an automobile and buy fruit than it was to raise it.
>
> The people themselves had changed. He could remember when all the farmers in this community were friendly toward each other; now they were continually having lawsuits. Their sons were either stingy and grasping, or extravagant and lazy, and they were always stirring up trouble. Evidently, it took more intelligence to spend money than to make it. (pp. 88－89)
>
> （クロードは思うのだが、彼が未だ子供で近所の人たちがみな貧しかった頃、彼ら自身も、彼らの家も、農場もみんなもっと個性があった……繁栄と共に干からびた無感動性がやってきた。どの人もかつては誇りにしていた古いものを全て打ち壊しにかかった。20年前はせっせと骨折って世話をし、面倒をみた果樹園は今や見捨てられ、荒れ果てて見る影もなくなった。果物を作るより、自動車で町へ出て買ってくる方が面倒がなくてよいのである。
>
> 人間自体も変わった。この地域の農民たちが皆お互いに親切だった頃をクロードは覚えている。今は絶えず裁判沙汰を起こしている。彼らの息子たちはというと、ケチで欲ばりか、それとも浪費癖でなまくらであるかであり、そして、何時もいざこざを起こしている。言うまでもなく、お金を儲けるより使う方がよっぽど頭がいるのである。）

ディヴァイドの開拓史を振り返る時、1890年代の前半に生まれたクロードに開拓時代の記憶があるというのは考えられないことであり、上記の言葉はディヴァイドの変貌に対するキャザー自身の断腸の思いを代弁したものと言えよう。言い換えれば、作者が物語の始まる年（1912年）を明らかにしていないのは、クロードがディヴァイドに対する彼女の思いを代弁する人物であることの証左である。というのも、キャザーがアントニーアのモデルであるアンナ・パヴェルカと再会したのは1916年であり、この感動的な出会いによって開拓地のディヴァイドと人間を讃える『私のアントニーア』(1918) が書かれたからである。このように、キャザーの作品には辻褄の合わない時差が多々見受けられるが、それは彼女の開拓者小説が自らの時間観と、その時間観に基づく世界観を忠実に反映しながら展開してゆく意識のドラマであり、時間のドラマであるからである。

さて、前途を夢見る知的な青年が未来のない郷里に背を向け、花の都に遊学するのは古近東西世

の習いであるが、ネブラスカの州都リンカーンで大学生活を送るクロードの場合は如何なるものであろうか。彼が学ぶテンプル大学は市の郊外にあって、経営難にあえぐ宗教系の学校で、州立大学に比べれば、施設は言うに及ばずスタッフも学生も二流である。「この大学で彼は暗澹として得ることのない冬を二回も過ごしてきた」(p. 22) という語り手の言葉を見れば、クロードの大学生活が如何なるものであるかは自明である。もともと彼が希望していた進学先は州立のネブラスカ大学である。にもかかわらず、テンプル大学へ送られた最大の理由は、この学校で教鞭を取りながら学生勧誘係を勤める、彼の嫌いなウェルドン牧師が母親のイヴァンジェリンを丸め込んだからである。クロードによれば、ウェルドン牧師は州立大学で進級できなかった為に、テンプル大学に転校せざるを得なくなった怠惰な鈍才であり、「自分たちの面倒を見てくれる人が欲しいので、牧師の職を選んだ」「勇気も熱意もない」(p. 46) 軽蔑すべき人間である。とはいえ、この牧師は「学生たちを獲得できない場合は、失職する」(p. 23) 立場にあり、一方クロードの母は牧師を無条件で「選ばれた人」、「聖なる人」と崇め奉る、世間知らずのファンダメンタリストである。とするなら、勝敗が何れにあるかは自ずと明らかである。次に、クロードの父は「自分の息子がどこの学校へ行こうが、少しも気にとめなかった」(p. 24) と述べられているが、しかし、彼は本質的にはインテリ嫌いの強欲なレッド・ネックである。「彼もまた宗派の学校の方が州立大学よりも安上がりなのは当然だと考えていたし、しかも、そこの学生の方が州立よりも服装が質素なので、知ったかぶりになったり、家でムカムカする程インテリぶったりすることは余りなかろうと思った」(p. 24) という語り手の言葉は、その確かな証左である。この両親の考えに加えて、親には断じて我を張ることの出来ない質の故に、クロードは州立大学を諦めてテンプル大学へと進学したのである。なる程「(死を正視する) 宗教に関して病的な恐怖心のあるインテリの青年を直せるものがあるとすれば、それはクロードが送り込まれたような宗派の学校」(p. 45) であるのは事実である。しかし、彼は「自分は罪多き人間ではあると身に沁みて感じはしたが、自分が未だ全然知らない世界というものを捨てる気にはなれない」(p. 45) エロス的な若者であり、かつまた、テンプル大学には「彼が多とする男らしい雄渾な品性」(p. 46) を備えた人物は皆無である。だからこそ、クロードは「この大学で暗澹として得ることのない冬を二回も過ごしてきた」のである。と見てくれば、2年前のテンプル大学への進学こそ、彼の嵌った第一の罠であると言えよう。この罠から逃れる道は唯一つ、州立大学へ転校することである。

9月に入って夏休みも残り少なくなり、リンカーンに戻る日が近付いてきた時、クロードは愛する母にテンプル大学の牧師たちが一流の教師ではないことを綿々と訴え、彼女を含めた身内の年長者たちから転校の許しを得ようとする。しかし、既に述べたように、彼の家族の特質を考えれば、その結果が如何なるものであるかは自明である。クロードの憧れる州立大学は母にとってはキリストの教えに背く悪の温床であり、父にとっては金のかかる無益な学校であり、弟の立派な体格を妬ましく思う「痩せ気味で胃弱」(p. 9) の兄にとっては憎むべきフットボールの強い学校でしかないのである。従って、クロードの期待は完全に裏切られ、彼は自己の人生に深い幻滅感を抱いて、9月の第二週に故郷を後にする。とはいえ、リンカーンに戻った、この不幸な若者を待ち受けているのは「二つの幸運なこと」(p. 33) である。一つはヨーロッパ史の特別研究聴講生として州立大学に籍を置くことが出来たことであり、後の一つは州立大学のドイツ系の学生、ジュリアス・エルリッヒと知り合いになれたことである。第一の点から見てみよう。

たとえ聴講生とはいえ、クロードは自由でアカデミックな州立大学で、しかも、かねてから私淑していた教授の下で学問が出来るのである。「彼は大学の図書館で朝早くから夜遅くまで勉強し、しばしば夕食は町で取ってから図書館に戻って閉館時間まで本を読んだ」(p. 34) という言葉は、州立大学に於ける学問の世界がクロードには喜びの世界であることを示す証左である。というのも、

彼は敬服する教授の授業を聴講すればする程、「世界には人を鼓舞させるような事が一杯あり、人間は生きてこういう事柄について学び得るのは幸せだ」(p. 34) という思いに酔いしれるからである。クロードの専攻科目はヨーロッパ史であるが、これは空間に於ても時間に於ても新大陸のアメリカが彼の憧憬の対象には成り得ないことを象徴的に示すものと言えよう。次に、クロードの身に起こった「第二の良いこと」(p. 34) について見てみよう。それは彼が大学間対抗のフットボール練習試合でジュリアス・エルリッヒと知り合い、それが縁で彼の家族とも知り合いになれたことである。エルリッヒ家は5人の息子を持つ母子家庭であり、経済的には決して豊かとは言えないが、この家族を通してクロードは、精神的に豊かな生活とは如何なるものであるかを教えられるのである。しかも、エルリッヒ家では家庭の主役を勤めるのは、母性愛に満ちたエルリッヒ夫人である。と見てくれば、エルリッヒ家はウィーラー家とは本質的に対照的であるのは自明である。「ここには、クロードが家族の集まりと言えば、すぐに連想した悪意を含んだ沈黙というものが微塵もなく」(p. 38)、「彼らは、ひたすら如何に生活するかを心得ていて、自分たちの金を人に代わって仕事をしてくれる機械、また人を楽しませてくれる機械の為ではなく、自分たちの為に使っている」(p. 39) のである。だからこそ、クロードは出来る限りエルリッヒ家を訪ね、聡明で心の暖かい夫人から人生について多くのことを学ぶのである。

1912年の9月以来、彼が「二つの幸運なこと」を享受している内に、いつしか時は過ぎて1913年の春となる。5月は研究論文提出の月である。クロードの研究テーマはジャンヌ・ダルクであり、これは教授の「とっさの思い付き」(p. 55) で彼に与えられたものである。にもかかわらず、彼がジャンヌ・ダルクの研究に寝食を忘れて没頭してきたのは、徹底的に死に逆らうエロス的な「理想主義者」のクロードにとって、このフランス娘が時の重荷を越える偉大な人物であるからである。「一人の人物が、かくも生き永らえる —— 絵によって、言葉によって、文章によって、あらゆる時代によみがえり、子供たちの心の中に生き続けて行くということは、大変不思議なことだと彼はつくづく思ってみるのであった」(p. 56) という言葉は、その確かな証左である。彼は「5月のある暖かい日の午後」(p. 56) 州立大学の史学研究室を訪ね、尊敬する教授に論文を提出する。「来年君はどうするか興味をもって見ていますよ。君の勉強ぶりは私にとって充分満足すべきものでした」(p. 58) という教授の称賛と期待の言葉は、クロードにとって生きることは喜びであることを意味するものである。というのも、彼の過去の労苦は全て報われ、また彼は教授の期待に応えて、再び「精神、想像力のロマンス」に生きる「行動の人」として学問に没頭できるからである。転校は許されなかったにしても、クロードのリンカーン生活が彼の身に起こった「二つの幸福なこと」を契機に、〈幻滅〉から〈喜び〉へと一変したことだけは確かである。従って、このネブラスカの州都に遊学して以来初めて、彼は未来への期待で胸を脹らませ、新学期を待ち遠しく思いながらも、夏期休暇を迎えて故郷に帰省する。しかし、悲劇的なことに、そこで彼を待ち受けているのは第二の罠である。

ある蒸し暑い晩の夕食後、父のナットは家族を居間に呼んで、「クロードの予定や考えていることを全て根こそぎ台無しにしてしまうような計画」(p. 58) を打ち明ける。それによれば、彼はコロラド州に新しい牧場を買い、それをラルフに任せて、1年のうち半分はその地で暮らすつもりなので、ウィーラー農場の管理と運営はクロードに引き継がせるというものである。州立大学での生活が如何に楽しく充実したものであろうと、クロードは飽くまでもテンプル大学の学生である。にもかかわらず、牧師になる気は更々ないとするなら、父の計画に正面切って異論を唱えることが出来ないのは自明である。語り手は「クロードはまるでピッシと罠にかかったように感じた」(p. 60) と述べている。ウィーラー家は「土地貪欲漢」のナットが牛耳る〈男の世界〉であり、母親のイヴァンジェリンが最愛の息子の不運に如何に胸を痛めようと、彼女にはどうすることも出来ない

のである。従って、彼女が敢えて夫に「自分たちにはその半分も耕作できないほど沢山の土地があるのに、何故これ以上土地を買うのですか」と尋ねてみても、「そういうのが女の言うことなんだ、イヴァンジェリン、そういうところが女なんだ」(p. 59) と一蹴されるだけである。クロードの20歳の年は幸運と喜びで始まったが、僅か1年足らずの内に不運と幻滅で終わり、彼にとって「人生は苦しみ」(p. 61) へと逆戻りするのである。

1913年8月31日、ラルフは家人や近隣の人々を仰天させる程の膨大な品物を買い込み、父と共に意気揚々とコロラド州の新しい牧場へと旅立つ。後に残されたクロードに出来ることは、とにもかくにも、毎日毎日朝早くから夕方遅くまで身を粉にして働き、その疲労感でもって夜は何も考えずに早く寝ることだけである。というのも、クロードのような若者が罠に嵌った己の不運を忘れる為には、こうする以外に道はないからである。語り手は「彼は大量の若いエネルギーをその土地に注ぎ込んだ。そして、また大量の憤懣をその黒々とした畔の中へと埋め込んだ。くる日もくる日も彼はその土地に打ち込んだ。そして、彼の中で燃えたぎるように醗酵しつつあるものをその土地に植え込んで、夜には何も考えられないほど疲れきっているのが嬉しかった」(p. 69) と述べている。しかし、この逃避的な生活の中で我を忘れることが出来るのも秋の収穫時までであり、その後で彼を待ち受けているのは「暗黒と不幸」[16] を象徴する「不満の冬」[17] である。具体的に見てみよう。

農閑期に入った11月下旬、クロードは感謝祭に行われるフットボールの試合を口実にリンカーンに出掛け、約四カ月ぶりで懐かしいエルリッヒ家を訪ねる。しかし、この家庭の知的で優雅な雰囲気に魅了され、予定の滞在日数を引き延ばして、彼らと交われば交わる程、心に痛く思い知るのは彼我の違いの大きさである。友人のジュリアスによれば、彼の将来の夢は大学の教授になることであり、その為に来年はヨーロッパに留学するとのことである。思い見れば、「彼らは絶えず前進し続けているのに対して、自分は静止状態のまま」(p. 73) であり、彼我の違いは時の経過と共に拡大してゆく一方である。その結果、クロードは絶望的な孤立感に苛まれ、以前にも増して自己の不運に対する「不満」(p. 73) をつのらせながら、12月の上旬10日滞在した冬のリンカーンを去ってゆく。この哀れな主人公に追い打ちをかけ、自分を取り巻く外部世界が一体如何なるものであるかを改めて彼に深く認識させるのは、家族の全員が集まるクリスマスの日である。先ず第一に、エルリッヒ家の生活方針を貶す兄のベイリスに、クロードが「ジュリアスは来年の秋外国へ留学するのですよ。彼は将来大学の教授になるつもりなんです」と反論しても、返ってくるのは「どうしたのかな？体でも悪いのか？」(p. 79) という言葉でしかないのである。次に、コロラドから帰省した弟のラルフが誇らしげに小指に填めているのは、大きなダイアの指輪である。この指輪をキラキラさせながら、彼のやる仕事と言えば、薄暗い納屋のランプの下で牛の乳を搾ることである。自動車の油が染み付いたラルフの太くて短い手と、その上で輝くダイアの指輪。この不調和な取り合わせを「成功した農業が行き着くシンボル」(p. 88) として捉え、今更ながらに自己を取り巻く外部世界を正視する時、クロードの心につのってくるのは未来に対する暗澹たる思いである。というのも、ディヴァイドの変貌は目を覆う程に醜いものであり、また彼自身の将来の見込みも弟のラルフと大して変わりはないからである。21歳のクロードは学歴も特技も人生経験もない「粗野で不器用な農業青年」(p. 89) でしかないのである。とはいえ、彼はラルフとは本質的に相異なるエロスの人、つまり、人生に夢とロマンを求める「愛する人」[18] であり、愛する対象がなくては生きることの出来ないタイプの人間である。リンカーンの生活の中でクロードを虜したのは「精神、想像力のロマンス」であるが、しかし今の彼にとって、そのロマンスを享受することは夢のまた夢である。とするなら、若いクロードの鬱積したエロスが、その捌け口を「心のロマンス」に求めて行くのは首肯できることである。そのロマンスの相手として、心を惹かれる女性が幼馴染みのイーニッドであり、この女性との結婚が彼の嵌る第三の罠である。

（Ⅲ）

第二巻の「イーニッド」（1914年４月－1915年６月）はクロードの求愛と結婚を描くものであるが、この表題自体に作者の痛烈な風刺が込められているのは一目瞭然である。というのも、イーニッドは彼の「心のロマンス」の相手としては、最悪の女性であるからである。物語は21歳のクロードがコロラド州にあるラルフの牧場を訪問してからネブラスカ州のデイヴァイドに帰る途中のデンヴァーを舞台に、「その年（1914年）の春のある日の午後」（p. 103）から始まる。春は「求愛」と「再生」の季節[19]であるとするなら、それはこの巻で「心のロマンス」に踏み出す主人公の門出を讃えるのに最も相応しい季節と言えよう。しかし、作者の関心と作品の力点が飽くまでも「破壊」としての時間の重荷にあることを考えるなら、クロードの求愛と結婚が、未来への〈期待〉で始まり、「怒りと失望と屈辱」（p. 168）で終わるのも何ら驚くべきことではあるまい。では、イーニッドとは一体如何なる女性なのであろうか。

彼女は、入植以来一貫して製粉所を営んできたディヴァイドの初代の開拓者ジェイスン・ロイスの娘（四人家族の次女）であり、クロードを取り巻く若い独身女性の一人である。粉屋と言えば、『サファイラと奴隷娘』（1940）のヘンリー・コルバートを連想させるが、この二人の粉屋に共通するのは、奇しくも、不幸な結婚生活であり、その最大の理由は身心を病む、我の強い妻が家庭で実権を揮う点にある。古典文学に精通した作者がロイス氏の名前を、魔女メディアを妻とするギリシア神話の英雄と同じにしているのは意味深長である。先ず第一に、かつて長女のキャロラインがキリスト教の宣教師として中国に行きたいという思いを両親に表明した時に、父親は「ある民族が他の民族に、その考え方や宗教を押し付けるやり方には私は反対だ。私はそういう人間ではない」（p. 187）と異を唱えたにもかかわらず、娘の考えに全面的に賛同して、彼女をその異教の国に行かせたのは母親である。次に、ロイス夫人は食事に喜びを求める夫の期待に只の一度も応えようとはしない程の狂信的な菜食主義者であり、彼女の最大の関心は自分自身の健康に対する病的な心配と管理にある。彼女は日々ロイス氏に町のホテルで外食させながら、自らは毎年ミシガンのサナトリウムに出掛けて、そこで快適な一夏を過ごすのは、その何よりの証左である。イーニッドはこの母と姉から決定的な影響を受けた女性である。つまり、彼女は母親と同様の徹底した菜食主義者であり、その最大の夢は姉の居る中国へ宣教師として渡ることである。言い換えれば、イーニッドは狭量な新教徒、つまり、独善的な禁欲主義者であり、母性豊かなアレグザンドラやアントニーアとは全く対照的な不毛の女性である。

『教授の家』はキャザーの風刺的作品の中で最も自伝的な意識のドラマ[20]であるが、この小説の第三人称の語り手、つまり、作者は主人公のセントピーターについて、「彼は断じて禁欲主義者ではなかった。個人的な悦楽については、自分がすごく利己的であり、その為に戦いもすることを知っていた。もし彼に楽しみを与えるようなものがあれば、その為に自分のシャツを売っても、それを手に入れた」[21]と述べている。この言葉は、取りも直さず、イーニッドのような狭量な禁欲主義者が、キャザーには我慢のならない人間であったことを明確に示す証左である。というのも、セントピーターは人間の理想に生きる精神の開拓者であり、「美の司祭」と言われる作者の理想像を具現する偉大な分身であるからである。「願望は創造である」[22]という彼の信念と「願望は成就である（求めよ、さらば与えられん）」[23]というマイラ・ヘンショウ（『我が不倶戴天の敵』［1926］のヒロイン）の悟りを思い見れば、キャザーが終生「願望」を肯定し続けたことだけは確かである。『我らの一人』を書き上げた後の1922年12月27日、49歳のキャザーがメソジスト宗派に見切りをつけて、聖公会に改宗したこと[24]は上記の事実を裏書きするものである。イーニッドがウェルドン牧師に心酔し、ことある度に彼の忠告と指導を仰ぐのは両者が本質的に同じ範疇に属する人間であ

るからである。この二人の独善的な禁欲主義者がクロードの名前を常にクロッド（間抜け）と発音するのは、彼らが過大な「願望」を追い求めて人生に躓く「不器用な農業青年」のクロードを、所詮「救われざる人間」(p. 154) と見做していることの象徴的な証左である。と見てくれば、クロードの「心のロマンス」の相手として、イーニッドが最悪の女性であることは明白なる事実である。

ここで、クロードを取り巻く今一人の若い独身女性として、物語の舞台に登場する高校の音楽教師、グラディス・ファーマーについて見ておきたい。彼女は父の死による没落の故に、南部からネブラスカの片田舎に移住した母子家庭の一人娘で、クロードの旧友にして尊敬の対象である。というのも、グラディスは「その美点が全て彼に影響して、彼の評判を良くする結果になる」(p. 98) 唯一の友人であると同時に、「世界を美しくするもの —— 愛、親切、それに余暇、芸術」(p. 134) に人生の第一義的価値を置く才女でもあるからである。彼らが初めて知り合ったのは高校時代である。彼女はまたイーニッドの無二の親友でもあるが、この二人の女性は本質的に相異なる人物である。作者がグラディスを自分と同じ誇り高い南部の生まれにし、しかも、彼女を「音楽家」、彼女の生前の父を「裁判官」として設定しているのは意味のないことではあるまい。つまり、グラディスは、ディヴァイドの卑俗な成金社会の中では「物笑いの種」(p. 90) であり、一種の敗北者であるクロードの真価を理解し、心秘かに彼を愛して、その大成を願う慈愛に溢れた聡明な娘、言ってみれば、『おお、開拓者たちよ！』の偉大なヒロイン、アレグザンドラ・ベルグソンのような母性愛を内に秘めた若い独身女性[25]である。語り手は次のように述べている。

> Claude was her one hope. Even since they graduated from High School, all through the four years she had been teaching, she had waited to see him emerge and prove himself. She wanted him to be more successful than Bayliss and still be Claude. She would have made any sacrifice to help him on. If a strong boy like Claude, so well endowed and so fearless, must fail, simply because he had that finer strain in his nature, —— then life was not worth the chagrin it held for a passionate heart like hers. (p. 135)
>
> （クロードこそ彼女の唯一の希望であった。彼らが高校を卒業して以来ずっと、彼女が先生をしていた4年間も、彼女は彼が頭角をあらわしてくるのを待っていたのである。彼女は彼がベイリスより以上に成功し、しかも、なおクロードであり続けることを願った。彼女は彼の助けになるなら、どんな犠牲をも払ったことであろう。クロードのようにかくも才能があり、恐れを知らぬ逞しい青年が、ただそういう優れた気質を持っているという理由で失敗しなければならないとしたら、人生は彼女のような熱情的な人間が耐えてきた苦しみに値しないと彼女は思った。）

「愛・親切・余暇・芸術」を賛美する貧しい音楽家のグラディスがディヴァイドの人々の間で常に悪意に満ちた噂の対象にされるのは、彼女が「例外的な人物」(p. 155) であるからである。と見てくれば、クロードの「心のロマンス」の相手として、グラディスが最適の女性であるのは誰の目にも明らかである。彼女の名前（Gladys Farmer）は、この女性こそが間違いなくクロードを「喜びに溢れた農夫」にすることを象徴的に示す証左である。Gladys は Claude の女性名 Claudia に通じる名前であると同時に、その愛称は Glad であることを指摘しておく。

にもかかわらず、デンヴァーから帰ったクロードが心を惹かれてゆくのはグラディスではなく、イーニッドである。というのも、テンプル大学を中退した後の1913年の秋、兄のベイリスがグラディスに思いを寄せ、時々彼女の家に立ち寄っていることが判明した瞬間、彼女はクロードの尊敬と憧れの対象から失望と嫌悪の対象へと一変し、それ以来、彼女の家を訪ねることを止めたからである。ここに、クロードの未熟さがあるのは歴然たる事実であるが、ウィーラー農場の野卑な男の世界が

「理想主義者」の若者に余りにも純粋な「ヒッポリタス的誇り」(p. 51) を植え付けていたことを忘れてはなるまい。キャザーの描く悲劇は運命悲劇であると同時に、性格悲劇でもあるのである。語り手は「クロードはグラディスには全く期待を裏切られた感じを持った。一度感情が傷つけられると、彼は滅多に自分の精神状態を理性的に振り返ってみることがなかった。彼はあたかも心の中の深い傷のように、その人間とその人間の考え方を嫌った」(pp. 80－81) と述べている。グラディスがベイリスに何の色好い反応も示していないことを当のクロード自身が知っているだけに、彼の豹変は語り手の言うように全く非理性的である。しかし、この理屈に合わない豹変こそ、クロードが心の底で如何にグラディスに憧れていたかを示す証左である。深層意識の中でクロードの憧れる唯一の女性がグラディスであり、彼女に色目を使うベイリスが彼の憎悪と侮蔑の対象であるからこそ、クロードは「グラディスこそはベイリスが特に結婚してはいけない町でただ一人の娘である」(p. 80) と煩悶し、その煩悶に正しく対処できない未熟さの故に、グラディスに対する彼の評価と感情が一変するのである。その結果、クロードはグラディスに背を向けざるを得なくなるが、しかし、彼のエロスの向かうところは異性にしかない以上、彼がもう一人の女友達、イーニッドに心を移してゆくのは自明の理であり、時間の問題でしかない。事実、1914年5月、デンヴァーからネブラスカに戻ったクロードが真っ先に足を向けるのはディヴァイドの製粉所屋敷であり、その目的は「貞淑で器量の良い」(p. 125) イーニッドに会う為である。

この二人の関係が決定的となるのは、数週間後の初夏である。畑仕事に向かう途中で、クロードは自動車の音に驚いて暴走した二頭の騾馬に怪我を負わされ、それが因で丹毒を患う。毎日彼を見舞いに来るのは、ここ最近特に親しくなったイーニッドである。ここで見落としてはならない重要な点は、彼女が定職を持つ必要のない富裕なロイス家の娘であり、しかも、車の運転が出来る特異な女性であるということである。自動車が物質主義時代の新しい製品であることは今さら指摘するまでもなかろうが、グラディスが如何にクロードの病に心を痛めようと、彼女にはイーニッドのような暇な時間も、また車という機械に対する積極的な姿勢も皆無であることは自明の理である。ともあれ、クロードが日々イーニッドの見舞を受け、彼女と過ごす二人だけの時間を重ねれば重ねる程、彼の心の中でつのってくるのは彼女に対する熱い思いである。というのも、クロードは毎日彼を見舞うイーニッドを一方的に美化して、「自分を世間と同調させ、周囲の生活に融け込ませる為の唯一の人物」と見做し、彼女との「結婚は人生にとって有益であり、満ち足りることへの始まりとなるだろう」(p. 127) という熱い期待で胸を焦がすからである。このイーニッドに対する的外れの評価を境に、クロードは作者の分身的人物から風刺小説の悲劇的な主人公へと変質してゆく。

イーニッドに対するクロードの評価が全くの検討違いであり、彼の夢見る「心のロマンス」が砂上の楼閣でしかないことは、次の諸点を見れば明らかである。先ず第一に、イーニッドとの結婚を心秘かに決めたクロードがロイス氏を訪ねて、その了承を求めた時に、この誠実な粉屋から返って来るのは「渋面」と「君が人生、特に結婚について信じている殆ど全てのことは、偽りであるということが分かるであろう」(p. 130) という自らの人生体験に裏打ちされた否定的な助言のみである。イーニッドのような菜食主義者を妻に持つことが幸福な結婚生活には決して繋がらないことをロイス氏から言い聞かされても、「そんなことは僕にとって、どうということはありませんよ」(p. 128) と笑って受け流すクロードの態度を見れば、彼の将来を真剣に憂慮するロイス氏の言葉ですらも、恋に恋する未熟な若者には所詮「馬の耳に念仏」でしかないのは自明である。次に、クロードが如何にイーニッドに恋焦がれようと、彼女は結婚に背を向け、中国の宣教師になることを切実に願う狭量な新教徒である。そのイーニッドが最終的に宣教師の夢を諦め、クロードとの結婚を決意したのは、彼を愛していたからではなく、彼女の尊敬するウェルドン牧師の熱心な助言に従ったからである。というのも、この卑俗な牧師はイーニッドから結婚の相談を受け、その相手が自分を

嫌悪しているクロードと分かった時に、異常な程に偏執的になり、「クロードを救いの道に入れる唯一の方法」(p. 137) として、彼との結婚を彼女に勧めたからである。イーニッドにとってクロードは、つまるところ、「救われざる人間」でしかないのである。この彼女に対して、21歳の逞しい青年クロードが第一に求めるものは、「止めることも、抑えることも出来ない程の感情」(p. 113)、換言すれば、彼の鬱積したエロスの捌け口である。と見てくれば、イーニッドが断じてクロードの幸福なエロスの受け皿と成り得ないのは誰の目にも明らかである。それをクロードに予感させるのが、彼女との待ち焦がれた接吻の体験であり、彼の見る夢の内容である。特に後者は、クロードの性願望がイーニッドの前では徹底した抑圧の対象であることを明確に示すものである。語り手は次のように述べている。

(1) A terrible melancholy clutched at the boy's heart. He hadn't thought it would be like this. He drove home feeling weak and broken. Was there nothing in the world outside to answer to his own feelings, and was every turn to be fresh disappointment? Why was life so mysteriously hard? (p. 134)

（言い様のない寂しさがクロードの心を締め付けた。このようになるとは彼は思ってもいなかった。彼は打ち拉がれた気持ちで家に向かった。この世には自分の気持ちに応えてくれるものは何一つないのか、そして、何をしても失望するだけなのか？なぜ人生は説明がつかない程、かくも苦しいものなのか？）

(2) . . . it was evening, and he had gone to see Enid as usual. While she was coming down the path from the house, he discovered that he had no clothes on at all! Then, with wonderful agility, he jumped over the picket fence into a clump of castor beans, and stood in the dusk, trying to cover himself with the leaves, like Adam in the garden, talking commonplaces to Enid through chattering teeth, afraid lest at any moment she might discover his plight. (p. 137)

（それは夕方で、彼はいつものようにイーニッドのところへ行っていた。彼女が家から出てくると、彼は自分が丸裸であるのに気付いた！そこでびっくりするような素早さで柵を飛び越えてヒマの茂みの中に入り、エデンの園のアダムのように、葉でもって隠そうとやっきになっていた —— 自分が裸であるのがいつ気付かれるかびくびくしながら、歯をガタガタさせながら、イーニッドに取り止めのない詰まらないことを口走っているのであった。）

にもかかわらず、クロードが信じるのは「冷たい自己満足的な娘を寛容で人を愛する人間に変える」(p. 152) 結婚の力、つまり、結婚によるイーニッドの変身である。だからこそ、彼は第一次大戦の勃発とパリの陥落に一時的には胸を痛めながらも、「小鳥のパラダイス」の林で、日々イーニッドと二人で暮らす幸福な「心のロマンス」を夢見て、村一番の新居の建築に全身全霊を打ち込むのである。しかし、上記の二つの挿話が暗示するように、イーニッドが性愛を忌避する女性であるとするなら、結婚による彼女の変身どころか、二人の「心のロマンス」そのものが最初から躓くのは自明の理である。クロードにとって悲劇的なことに、それが判明するのは二人が結婚した夜のことである。というのも、彼は新婚旅行の最初の晩に、デンヴァー行急行列車の特別寝台車から新妻によって締め出されたからである。不潔な展望車の中で、着替えもせずに一夜を過ごす破目になった、惨めなクロードの心の中で煮え滾るのは、「怒りと失望と屈辱の嵐」である。かくして、クロードの求愛と結婚は、過大な〈期待〉で始まり、屈辱的な〈幻滅〉で終わるのである。時は1915年6月初旬、クロードは22歳である。では次に、第三巻の「平原に日は昇る」(1915年8月－1917年7月) について見てみよう。

(Ⅳ)

第三巻の内容は、結婚生活に裏切られたクロードの絶望的な生活とアメリカ遠征軍の一員としての未来への旅立ちを描くものである。先ず第一に、「平原に日は昇る」という表題は、第一次大戦後の虚無的な世界を大胆に描いたヘミングウェイの有名な小説『日はまた昇る』(1926) を連想させるが、この作品の冒頭に掲げられているのは「世は去り世は来る。地は永久に在つなり。日は昇り日は沈み、またそのい出し所に喘ぎゆくなり。風は南に行き、また転りて北に向かい、旋転に旋りて行き、風またその旋転る所にかえる。河はみな海に流れ入る。海は満つることなし。河はそのい出きたれる所にまた還りゆくなり」[26] という「伝道の書」の一節である。次に、クロードが月の女神に憧れるエンディミオン的な若者である[27]とするなら、彼にとって「日の昇り」は明るい希望の象徴とは成り得ないのも確かである。「太陽は小麦畠の上を出入りするだけの存在」(p. 178) であるのに対して、月はグラディスのように「心を高く掲げた人々」の「無二の親友」(p. 178) であり、「充たされぬ憧れと実らぬ夢を持つ月の子供たちの方が、太陽の子供たちよりも繊細な人間なのだ」(p. 179) という彼の思いは、その確かな証左である。と見てくれば、第三巻の表題にもまた作者の苦い風刺が込められているのは自ずと明らかである。というのも、クロードの参戦こそ彼が嵌る第四の罠、最終的には彼の命を奪うことになる最も恐ろしい死の罠であるからである。結婚生活に破綻したクロードが「草原高く日が昇った」時刻に、凛々しい軍服姿で挫折の地を後にするのは〈風刺〉というよりも、むしろ〈悲劇〉である。時の重荷に支配された輪廻の世界に存在するのは虚無と幻滅であり、その終着点は救いのない死のみである。では最初に、クロードの結婚生活から見てみよう。

結婚して初めてクロードに分かったことは、イーニッドが完全に期待外れの女性であり、従って、彼の夢見た「心のロマンス」は全くの幻想であったという事実である。「もうこれで自分も終りだ」(p. 181) という彼の絶望は、その明白な証左であり、「彼の白昼夢のあるものは新妻の血を恐怖で凍らせるようなものであった」(p. 182) という語り手の言葉は、クロードが意識の深層でイーニッドに対して如何なる思いを抱いているかを如実に示すものである。というのも、彼女は〈陣痛の苦しみをイヴが戒律を破った故に、女に課せられた宿命〉と信じ、「男の抱擁に関わる全てのこと」(p. 180) に嫌悪感を抱く非母性的な女性[28]であり、しかも、「結婚して二、三カ月も経たない内に、禁酒運動の為に、車で二千マイル以上も駆け巡る」(p. 180) 狂信的な宗教活動家であるからである。イーニッドのニワトリの飼い方（一群のメンドリに対して、ただ一羽のオンドリ）と育て方（冬雛の育成）は、彼女が「自然の法則」(p. 175) に反した不毛の禁欲主義者であり、彼女の母や姉と同様、自己の思想を他者にも強いる唯我独尊的な女性であることを象徴的に示すものである。「年をとるにつれて、ロイス氏は、自分の妻や娘たちが人の世の暖かさや慰めに殆ど貢献しなかったということを考えると、ますます心が沈むのであった……彼の娘たちには暖かい心が全然ないように思われた」(p. 214) というイーニッドの父親の述懐は、その何よりの証左である。

クロードが不幸な結婚をしてから1年半後の1916年12月、イーニッドは姉キャロラインの看病を口実に中国へと旅立つ。ただ一人新居に残されたクロードの心を日々苛むのは、「生まれてくるには何と嫌な世の中だろう」(p. 189) という人生への幻滅と絶望である。というのも、日の下で繰り返されるディヴァイドの生活には時間の意義は全く存在しないからである。「これから先、何に希望が持てるのだろうか？」(p. 193) というクロードの絶望感は、彼の夢と期待を悉く裏切り続けてきた虚無的な輪廻の世界から生じたものであり、「空の空なる哉。全て空なり。日の下に人の労して為すところの諸々の働きは、その身に何の益かあらん」[29] という「伝道の書」の一節を又しても連想させるものである。かくしてクロードの24歳の冬は、その始まりから「暗黒と不幸」に覆い包まれ、時の経過と共に彼の絶望感を深めてゆく。

とはいえ、春が再び巡ってきた時、虚無と絶望の世界からクロードを救い出すのはアメリカ参戦

のニュースである。というのも、彼はアメリカの遠征軍に参加して、フランスを守る血と肉の楯となることに誠の生き甲斐を発見するからである。彼がエルリッヒ夫人の母国であるドイツを如何に高く評価しているにせよ、ドイツ帝国主義の野望と蛮行はもはや断じて許すことが出来ないほど明白であり、しかも、その野蛮なドイツに侵略されて苦悶するフランスは彼の理想と憧れの国である。クロードがアメリカ遠征軍に志願するのは、祖国の参戦表明を知ったすぐ後であるが、これは第一次大戦が、彼にとって、まさに聖戦であったからである。「彼は、憤怒ではなく、絶対的な気高さと騎士道精神でもって戦争をする遠征軍に加わって、自分は海を渡るのだと信じていた」(p. 213) という語り手の言葉は、その明白な証左であると同時に、自他共に認める彼の一大変身を意味するものである。この小説のタイトルが示すように、クロードは第一次大戦に参戦したアメリカ遠征軍の一員ではあるが、彼の心酔する人物がフランスの偉大な女性兵士、ジャンヌ・ダルクであることを忘れてはなるまい。つまり、クロードは、遠征軍の軍服を身に着けることによって、人生に挫折した惨めな敗北者（物笑いの種）からフランスを救う聖戦に出陣する勇者、言ってみれば、ジャンヌ・ダルク的な英雄へと一変するのである。具体的に見てみよう。

先ず第一に、フランス遠征を目前にした1918年（原典では1917年となっているが、これは明らかに誤りである）7月、1週間の休暇を与えられたクロードは軍服姿でオマハからフランクフォート（レッド・クラッド）行きの列車に乗るが、この軍服姿が彼を英雄に変身させるのである。彼が車中では「家路に向かう途中の『オデュッセイ』の主人公」(p. 209) のように遇され、また途中の乗り換え駅で列車を降りる時には、「乗客の全てが彼に会釈をした」(p. 210) のは、その確かな証左である。次に、クロードは故郷の人々から「物笑いの種」にされてきた人生の敗北者であり、かつまた誇り高い「理想主義者」であるだけに、この国民的英雄視が彼を外面的のみならず内面的にもドン・キホーテ的な勇者、換言すれば、不正を正す「行動の人」へと変身させるのである。だからこそ、彼は上記の体験のすぐ後で、乗り換え駅の近くで食堂を営む善良なドイツ系の老女、フォイクトを苦しめる〈悪童たち〉に一人で立ち向かい、彼らに対して毅然とした態度を示すのである。第三に、ウィーラー農場が卑俗な男の世界であり、クロードの変身が嘘でないとするなら、父と弟が彼を別人として迎え入れるのも何ら驚きべきことではあるまい。語り手は次のように述べている。

(1) Mr. Wheeler explained and exhibited the farm to Claude as if he were a stranger; the boy had a curious feeling to being now formally introduced to these acres on which he had worked every summer since he was big enough to carry water to the harvesters. (p. 217)

（あたかも初めての人に説明するかのように、父はその畠をクロードに見せ、そして説明するのであった。クロードは、収穫機に水が運べるようになった年頃から、毎夏働いてきたこれらの畠を今畏まって紹介されることに妙な感じがした。）

(2) . . . until now Ralph had always felt a little ashamed of him. Why, he used to ask himself, wouldn't Claude "spruce up and be somebody"? Now, he was struck by the fact he was some body. (p. 223)

（ラルフは何時もクロードについては恥ずかしい思いをしていた。なぜ兄が「ぱりっとした男一匹」にならないのだろうか、と彼はよく自分自身に言ってみたものであったが、今やラルフはクロードが立派な男一匹になっている感を深くするのであった。）

第四に、クロードは「彼の運命を決定づけた」二頭の騾馬に出会って、「二頭の騾馬によって結婚に持ち込まれるとは如何にも自分らしいことだ！」(p. 215) とユーモラスに述懐しているが、この述懐こそ彼が己を笑うことの出来る、心の余裕のある人物に変身していることを端的に示すものである。とはいえ、クロードとイーニッドを結び付けた究極の要因は、二頭の騾馬ではなく、そ

の騾馬を驚かせて暴走させた新しい時代の機械、自動車であることを忘れてはなるまい。第五に、フランス遠征を目前に控え、また過去の愚かな自分を笑うことが出来る人間に変身したからこそ、クロードは長らく背を向けてきたファーマー家を訪ねるのである。というのも、後顧の憂いを無くする為には、彼自らがファーマー家を訪問して、グラディスに会わなければならないからである。クロードはイーニッドとの結婚に失敗して初めて、グラディスの真価に気付き、この貧しくも聡明な女性を純粋に心の底から愛するが故に、彼の心を苛む唯一の心配は、彼女と彼の兄との結婚問題である。「ベイリスは不戦論者で、常々アメリカ合衆国がこの戦争に加わらないで、ヨーロッパが無駄にしているものを蓄積すれば、やがて全世界の資本を手中に収めることが出来るのだと人々に公言していた」(p. 200) という語り手の言葉は、この不戦論者が一体如何なる人間であるかを如実に示すものである。しかし、「私がベイリスと結婚するなんてとても考えられないわ……だって、私が何時も尊敬してきたのは貴方ですもの」(p. 221) というグラディスの返答は、クロードの後顧の憂いを完全に払拭するものであると同時に、彼に対する遅すぎた愛の告白であると言えよう。「貴女は、なぜ僕が笑い者にならないようにしてくれなかったのですか？」(p. 222) というクロードの思い詰めた問い掛けは、その哀しい証左である。たとえ二人の恋はもはや叶わぬものではあるとしても、グラディスがクロードに与えた保証、つまり、彼女がベイリスと断じて結婚する意思のないことだけは確かである。

クロードが過去の人生に於て次から次へと失敗を重ねてきたのは、つまるところ、彼を取り巻く外部世界が時の重荷に支配された輪廻の世界であるからである。とするなら、「人を理解するのは、その人の失敗、何が出来なかった、ということによるのじゃなくて。もしも貴方が他の人達のようだったら、その人達と同じ運命になるところだったわ。それは私には耐えられないことだわ」(p. 222) というグラディスの言葉は、彼女の聡明さを示す証左であると同時に、クロードに対する愛と期待を意味するものである。彼女は終始一貫してクロードの真価を理解し、彼の大成を願う聡明で母性的な女性である。だからこそ、彼女はクロードの過去の失敗を高く評価することによって、彼に新たな自信と誇りを与え、彼の故郷脱出と新しい未来への旅立ちを心の底から祝福するのである。ドイツに対するアメリカの宣戦布告は、正義を愛するアメリカ国民が等しく待ちかねたものであり、ドイツに侵略されたフランスを救う為に大海原を渡るアメリカ遠征軍は、少なくとも大戦後のアメリカ社会の醜い変貌を見る迄は、自他共に認める国民的な英雄であった[30]ことを忘れてなるまい。

グラディスと会って後顧の憂いを完全に清算し、彼女によって己の過去と未来を祝福された翌日、クロードは凛々しい軍服姿で愛する母に別れを告げ、ディヴァイドの地平線の彼方へと旅立つ。では、第四巻の「アンキーセース号の航海」(1918年夏) について見てみよう。

(V)

第四巻はクロードが入隊してから1年数カ月後の「ある夏」(1918年) から始まり、フランス戦線に向かうアメリカ遠征軍部隊の大西洋航海を描くものである。クロードを含め、2,500名の国民的英雄を乗せて大海原を渡るのは、貧弱な木造の老朽船アンキーセース（英語読みではアンカイシーズ）号であり、アンキーセースとは陥落したトロイの町から逞しい息子のアイネイアースに背負われて脱出した盲目で跛の老人[31]である。と見てくれば、第四巻の表題にもまた作者の風刺が込められているのは一目瞭然である。というのも、「老いたるアンキーセース号」(p. 257) に「栄光への脱出」を期待することは断じて不可能であるからである。アンキーセース号に乗船したアメリカ遠征軍の若武者たちがニューヨーク港を出る時に、自由の女神に対して誓う「不屈の決意」(p. 234) と彼らに贈る老牧師の称賛と激励の言葉、「おお、汝、合衆国もまた船出せよ。人間の尊厳、その未来の不安と希望を抱えつつ、それは汝の双肩にかかれり」(p. 234)[32] は、アメリカ遠征軍

の兵士たちが自他共に認める国民的英雄であることを示す証左と言えよう。とはいえ、この若者たちの船出が如何に喜びと希望に満ちたものであろうと、彼らを乗せて荒海を進む木造の老朽船が名実共に「老いたるアンキーセース号」である以上、彼らの行く手に「悪夢のような航海」(p. 271)が待ち受けているのも何ら驚くべきことではあるまい。

出航して早三日目に、船内に悪性のインフルエンザが発生し、その猛威が劣悪な環境の中で燎原の火のごとく蔓延してゆくにつれて、アメリカ遠征軍の若者たちは次々と呆気なく死んでゆく。というのも、彼らは本当のところ英雄でもなければ、勇者でもなかったからである。語り手は「死亡者名簿は日に日に増えていったが、最悪なことには、余り病気でない者が次々に死んで行ったことである。19歳や20歳の元気一杯で清純な若者たちが、裏を返したように死んでいった —— 勇気を失ってしまった為に、ただ他の者たちが死んで行くという理由で、そして、死の気配が立ち込めているという理由から……トルーマン軍医の言うには、伝染病の蔓延の時には全てこうで、個人の場合だと回復する患者ですらも、こういう場合では死んでしまうということであった」(p. 264) と述べている。しかし、非情なことに、世界的な聖戦という「偉大な事業」に於ては、弱者は「単なる廃物として、腐ったロープ」(p. 272) のように海中に投げ捨てられてゆくだけである。

死神に襲われた「アンキーセース号の航海」を船医は「悪夢のような航海」と呼んでいるが、しかし、語り手は「この船の上の現在の生活ほど、クロードを魅了するものはかつてなかった」(p. 265) と述べている。それは何故であろうか。先ず第一に、生来屈強な肉体に恵まれ、しかも、外面的のみならず内面的にも国民的英雄に変身したクロードに死神の付け入る隙がないのは自明であるが、今の彼は自他共に認める遠征軍の将校（中尉）である。従って、疫病が猛威を振るえば振るう程、軍の上官として軍医を助け、病める同胞の激励と看護に奔走する頼もしいクロードの存在は日毎に重要性を増し、それが彼にかつて体験したことのない生き甲斐と自信と誇りを与える結果となるからである。次に、クロードが激務から解放された自由な時間の中で「栄光への脱出」を意識すればする程、彼にとって確かなことはアンキーセース号が刻一刻とフランスを目指して前進しているという事実である。この確かな空間上の移動が、クロードを暗い過去から解き放ち、彼に「少年時代が終わったところから人生のやり直しをしているように思わせる」(p. 259) のである。キャザーの作品世界に於て、アメリカからヨーロッパへ向かう大海原の航海が、過去（青春）への退行による精神的再生を意味することは「処女作」の『アレグザンダーの橋』にも当て嵌る事実である。と見てくれば、現在の船上生活がクロードを虜するのも首肯できることである。というのも、彼はアンキーセース号を舞台とする「二重生活」(p. 259) の中で、ある時は頼もしい軍の上官（現在の自己）として、またある時はバラ色の未来を夢見る若者（「若い自己＝青春の自己」）[33] として、惨めな〈過去の自己〉を完全に抹殺することが出来るからである。

入隊前のクロードは「二つのロマンス」に躓いた「粗野で不器用な農業青年」であり、物笑いの種でしかなかったが、今の彼は病人の生死を左右する程の重要人物であり、聖戦に赴く若き国民的英雄である。その彼我の違いを最も自覚するのはクロード自身である。だからこそ、彼は過去の自分と現在の自分を対比すればする程、自己を変身・再生させた第一次大戦に対して「使命感、神託のような使命感」(p. 266) を覚えざるを得ないのである。「毎朝彼は、あたかも世界が日毎に大きくなって行き、そして、それと共に彼自身も大きくなって行くかのような、自由と前進の感じで目覚めるのであった。他の者たちは病気で死んで行く、それは確かに恐ろしいことだ —— しかし、俺とこの船は行くのだ、絶えず前進して行くのだと思った」(p. 265) という語り手の言葉は、その確かな証左である。既に指摘したように、クロードは徹底して死に逆らうエロスの人であるが、「エロスとは根本的に自己愛的」[34] であることを忘れてはなるまい。この「自己愛」の人が究極的には「老いたるアンキーセース号」の呪われた「前進」を、「栄光への脱出」と捉えているところ

に作者の風刺がある。ネブラスカ、延いてはアメリカに対する作者の幻滅は、かくまでに救いのないものであったのである。では、第五巻の「〈西部の鷲よ飛べと念じつつ〉[35]」（1918年真夏--大戦後のある時点）を見てみよう。

（VI）

第五巻はクロードが16日間に亙る大西洋航海を終えて、遂に「花のフランス」（p. 288）に上陸した「その日の昼」から始まり、その内容は最後の最後まで時間の意義を確信して戦死するクロードの短くも充実した生活と、彼の死後、その信念の虚しさを読者に徹底的に思い知らせる大戦後のアメリカ社会の醜い変貌を描くものである。とするなら、第五巻の表題にもまた作者の痛烈な風刺が込められているのは明白である。というのも、作品の力点は新大陸のアメリカを決定的に堕落・変貌させたのは第一次大戦であり、その意味に於てクロードの死は全くの無駄死にであったという点にあるからである。『我らの一人』が不当に酷評され、軽視されてきた最大の原因は、この作品の形式と内容に込められた作者の風刺の深刻さが正当に理解されなかった[36]からである。

さて、クロードの変身と精神的再生が本物であるとするなら、彼が憧れの新天地で過去の汚名（物笑いの種）を挽回するには、軍人（アメリカ遠征軍の将校）として成功する以外に道はないのは自明である。換言すれば、フランスを舞台とする意識のドラマに於て、ジャンヌ・ダルクに憧れ、「理想主義者」としての「成功の夢」に捉われた軍人のクロードが演じる役は、〈ヒロイズムのロマンス〉に生きる輝かしい英雄であり、またそうでなければならないのである。上陸早々、チーズを買えない哀れなアメリカ兵たちの為に、うろ覚えのフランス語（「チーズがありますか？マダム」）を屈しして、とにもかくにも通訳の役を演じた時に、「人生で最も勇敢な行為を成し遂げた」（p. 276）と自負し、逆に、尊敬の眼差しで時間を尋ねる少年のフランス語が全く理解できない故に、人生最大の「挫折感に襲われ」、「この国の〈子供たち〉と会話が出来ないようなら、いっそのこと帰国してしまうぞ」（p. 279）と落胆するのは、その微笑ましい証左である。「栄光への脱出」によって、惨めな過去の世界と決別し、エロス的な若武者として再生したクロードにとって、「花のフランス」こそは己の美しい姿を映す泉でなければならないのである。

上陸から戦死に至る迄のクロードのフランス生活は、大よそ次の通りである。1918年８月初旬、フランス南部に上陸→中北部の訓練キャンプへ移動→デェイヴィッド・ゲルハルト中尉（上記の訓練キャンプで知り合い、以後生死を共にするインテリの戦友）と共にジュベール夫人宅に約16日間滞在→８月下旬、前線を目指して進軍→修道女オリーヴ・ドゥ・クルスィ嬢を訪問→９月８日、敵と交戦→10日間の休暇を利用して、ゲルハルトと共にジュベール夫人宅とフレーリ夫人宅を訪問→９月20日、大隊に合流→1918年10月初旬、アルゴンヌの戦闘で戦死。この二カ月程の短い期間こそ彼の人生に於ける最良の日々であったと言えよう。というのも、クロードは憧れの新天地で、軍人として見事に人生をやり直すことが出来たからである。誠の生き甲斐を求めて、惨めな敗北と挫折を繰り返してきた「理想主義者」の人生の旅は、戦時下のフランスに来て初めて報われたのである。彼の死後、母親のイヴァンジェリンは「クロードが —— あんなにも物笑いにされることを恐れてきた彼が —— 遠い世界（冥土）に旅立つ前に、何と充実した人生を見出したことか」（p. 390）と述懐している。では、クロードを死をも恐れぬ程、内面的に充実した勇者へと駆り立てて行ったものは一体何であったのか。

それは、「理想主義者」の彼にとって、第一次大戦が正真正銘の聖戦であり、フランスとの係わりが、その信念を不動のものとしたからである。というのも、唯我独尊的な不毛の女性イーニッドとの「心のロマンス」に躓いた後で、絶望の国から憧れの国へと「栄光への脱出」を果たしたクロードにとって、フランスとは本質的に彼の故郷、つまり、醜い男の世界とは相異なる母性的な女の世界であったからである。従って、クロードがフランスに魅せられようと、またその戦争の傷跡に心

を痛めようと、何れの思いも最終的には彼を〈聖戦の勇者〉へと駆り立てて行く結果になるのは自明である。思い見れば、ネブラスカの闇の世界で苦悩するクロードに精神的な安らぎと慰めを与えてきたのは、母親、マヘイリー、エルリッヒ夫人、老女フォイクト、更に付け加えれば、グラディスであるが、これらの人物は何れも何らかの意味で〈生〉と連関する母性的な特性を秘めた女性[37]であると言えよう。では、彼の目に映るフランスの母性的な女の世界と、その戦争の傷跡を具体的に見てみよう。

先ず第一に、フランスに上陸した最初の夜に、クロードの心を虜にするのは、煌煌たる月光のもと、崩れ掛かった教会の入口で左腕のない傷心のアメリカ兵をいたわる美しいフランス娘の姿である。このアメリカ兵は戦闘で記憶を喪失した傷痍軍人であり、その特質は彼が故国の女性、母親のみならず婚約者ですらも全く思い出すことが出来ないという点にある。彼が「迷えるアメリカ人」(p. 287) と呼ばれ、また帰国できるにもかかわらず、断じてその意思がないのは、アメリカがもはや彼を暖かく迎え入れてくれるような母性的な女の世界ではないことを象徴的に示す証左と言えよう。次に、中北部の訓練キャンプへ移動する途中のルアンの町で、クロード（文化的には不毛の砂漠である男の世界から憧れのヨーロッパにやって来たネブラスカの田舎青年）を魅惑するのは、長い歴史と豊かな文化を秘めたサン・ルアンの大聖堂であり、その大聖堂の中で彼がしみじみと実感するのは故郷の母親との一体感である。大聖堂とは本質的に母性的な女の世界に属する聖なる空間[38]であることを忘れてはなるまい。

第三に、クロードが中北部の訓練キャンプで特訓を受ける2週間の間、ゲルハルトの紹介で彼の宿営先となるのが、牧歌的な田園地帯に住むジュベール夫妻の家である。ジュベール夫人は50歳位の知的で魅力的な中年女性であるが、「ゲルハルトのように（フランス語で）夫人と会話することが出来たら」(p. 303) という賛嘆と妬みの交錯したクロードの願望は、何よりも母性的な女性に心を引かれる彼の特性を示すものであり、また「女性たちによって世話される家で、のんびり床に入っていることは良いことであった」(p. 297) というクロードの満ち足りた満足感は、彼の宿営先がジュベール夫人を中心とする母性的な女の世界であることを示すものである。とはいえ、この魅力的な女の世界の裏側に秘められているのは、痛ましい戦争の傷跡である。ゲルハルトによれば、ジュベール夫人は息子を二人とも戦争で失い、また夫人が面倒を見ているベルギーから来た難民の少女は、一日中庭から外へは一歩も出ず、また毎日夜になると何かに怯えて恐ろしい金切り声をあげているとの噂である。

第四に、クロードの所属するB中隊が2週間の猛訓練を受けた後で、初めて前線に向けて進軍した初日に、彼が遭遇するのが避難途中の哀れなフランス人母子、膝に赤ん坊を抱いた重病の母親と泥に塗れた三人の子供である。この家族のリーダーは11歳の少女アントアネットであり、彼女によれば、母親に抱かれている赤ん坊は彼女の兄弟ではなく、〈ドイツ人〉であるとのことである。どんな歪められたフランス語でも平気で聞き分け、「ずるそうで落ち着かない眼」(p. 306) をした戦災少女、アントアネットの言葉の意味を真に理解した時、クロードの心を苛むのは〈来るのが遅すぎた〉という断腸の思いである。語り手は「この憔悴し切った婦人が赤ん坊に乳を飲まそうとしている姿は余りにも痛々しく、殆ど正視に耐えない程である」(p. 307) と述べているが、平和な女の世界に降り懸かった禍の象徴とも言うべき、この赤子の性は男である。

第五に、クロードが前線からマルヌ川河畔の師団司令部へ派遣された時に、この町の赤十字小屋に英語の出来る数人のフランス人女性が働いていると聞いて、彼女たちの居る女子修道院を訪ねるが、そこで出会うのが「非の打ち所のない」(p. 322) 修道女のオリーヴ・ドゥ・クルスィ嬢である。「彼は何時もアメリカ人を嫌うフランス人に会うのが怖かった」(p. 322) という語り手の言葉が示すように、クロードは心の底ではフランス人に対して憧れと劣等感を抱く若者である。しかし、

オリーヴ嬢と母国語で対話し、しかも、彼女によって心の底から歓迎されて初めて、彼はフランス人に対する屈折した感情から解放され、今更ながらに己の任務の重要性を思い知るのである。彼女もまた「理想主義者」のクロードをしてクロードたらしめる母性的な女性の一人であると言えよう。オリーヴ嬢は24歳の若い女性ではあるが、しかし、彼女は性愛とは無縁の献身的な修道女である。だからこそ、彼女は、ヒッポリタス的な特性を秘めたクロードにとって、母性的な女性と成り得るのである。「ただ土地と、それに前途に希望さえあれば、そういう品物は全部改めて作ることが出来ます。作られた物が如何に取るに足らないものであるかということを、今度の戦争が我々全員に教えてくれました。重要なのは人間の心です」（pp. 328－329）という彼女の言葉を聞いた時に、クロードは感動に胸を震わせながら「正にその通りである」（p. 329）と述懐している。戦争で破壊された女子修道院の庭園の修復に精を出すルイの仕事ぶりを見れば見る程、「土地貪欲漢」を父とするクロードはフランス人の自然観に感激せざるを得ないのである。「このようにしてまで自分の土地を愛するとは、また樹木や草花を愛し、病める時は癒してやり、傷ついた時は片腕でいたわってやるとは、何と意味深いことであろうか」（p. 330）というクロードの思いは、その証左であると同時に、母性的な女の世界に対する彼の賛美を意味するものである。というのも、ルイが女子修道院の庭の手入れに身を打ち込むのは、母なる大地を愛するからであり、また彼の敬愛するオリーヴ嬢に喜びを与える為であるからである。とはいえ、クロードはこの女の世界にもまた痛ましい戦争の傷跡を認めざるを得ないのである。先ず第一に、オリーヴ嬢の父と兄は既に戦死し、また彼女の下で働く忠実な下男のルイが片腕をなくしたのも、この戦争の為である。新大陸の醜い男の世界から来た軍人のクロードにとって、フランスが彼を虜にする女の世界であったからこそ、彼は〈聖戦の勇者〉としてフランスの為に己の命を捧げる結果になるのである。クロードを女子修道院に案内したのは少女のマリーであるが、彼女はその道案内の途中で、ある教会に立ち寄り、幼児キリストが吹き飛ばされた聖母子像を彼に示して、「赤ちゃんは壊れてしまったけど、母親を守ってあげたのだわ」（p. 324）と述べている。この聖母子像の姿は、フランスを守る為に己の命を捧げるクロードの未来の姿を象徴的に示すものと言えよう。

第六に、これ迄とは逆に、兵を率いて前線に進軍する軍人ではなく、軍務から解放された旅人として、前線から遠く離れれば離れる程、クロードを虜にするのはフランスの田園の美しさと、その田園を作った人々の素晴らしさである。「この美しい大地、この素晴らしい人たち」（p. 344）という彼の感嘆の言葉は、その証左である。時は1918年９月中旬、B 中隊が敵の守備隊と交戦して19名の戦死者を出した数日後。10日間の休暇を利用して、クロードとゲルハルトが静養に向かうのは、懐かしいジュベール夫妻宅である。４日後、母性的なジュベール夫人を中心とする牧歌的な田園の世界に舞い戻り、「無上の幸福感」（p. 343）に酔いしれるのはクロードであり、散歩に出た森の中で彼の抱く白昼夢は、この国の田園に生きる未来の幸福な自己の姿である。語り手は「彼としては、もう故郷へは決して帰らないであろう。この大戦争が終わったら、自分はこのフランスの地に小さな農場を買って、残りの人生を過ごすかもしれない。これが彼の喜んで心に描く夢である。故郷には彼の求めるような人生の希望はない。そこでは人々は絶えず売り買いをしたり、建築をしたり、取り壊したりしているだけである。アメリカ人は浅薄な感情の国民であると、彼は感じ始めていた」（p. 345）と述べている。

憧れの異国の地でバラ色の未来を夢見るクロードにとって、時間は肯定の対象以外の何物でもないのは自明である。だからこそ、幸福な白昼夢に我を忘れた翌日、ジュベール夫人の家で26歳（原典では25歳となっているが、これは明らかに誤りである）の誕生日を迎えた時に、彼は「これまでに経験したことのないような幸せな〈青春〉が、今自分にやって来つつあるということをしみじみと思った」（p. 349）のである。語り手は「人生は結局彼には美しいものに思われてきて、人生の

一つ一つが尊い意味を持ってきた。考えてみると、彼が何年間もその状態にあった精神的な不安と緊張は、今や彼にとって馬鹿らしく、子供っぽく、とても信じられないように見えた。もう彼は過去の回想によって自分を苛むことをしなかった。彼は全てを初めからやり直そうとしていた」(p. 349) と述べている。

『我らの一人』は時間に捉われた作家、キャザーが4年の歳月をかけて書き上げた労作である。従って、彼女が最終巻に至って初めて主人公の年齢を取り違え、「次ぎの日はクロードの25歳の誕生日であった」(p. 349) と述べているのは、単なるケアレス・ミスではなく、極めて意図的なものであると思われる。とするなら、それは何故であろうか。1892年9月生まれのクロードが故郷からオマハに出向いて、第一次大戦に志願したのは1917年4月、24歳の時であり、彼がこの地にある軍事訓練所で過ごした期間は1年数カ月である。従って、クロードが25歳の誕生日を迎えたのは、フランスではなく、アメリカということになる。と見てくれば、上記の引用文に作者の風刺が秘められているのは明白である。というのも、作者はクロードの年齢を意図的に取り違えることによって、彼を虜にした楽天的時間観が全くの〈幻想〉であり、所詮は虚しい夢のまた夢でしかないということを言外に意味することが出来るからである。換言すれば、第一次大戦に巻き込まれたクロードのような若者たちにとって、究極的には時間の意義は存在しないのである。それを明確に裏付けるのが、彼女の代弁者であるゲルハルトの言葉である。彼はクロードに次のように述べている。

> "Because in 1917 I was twenty-four years old, and able to bear arms. The war was put up to our generation. I don't know what for; the sins of our fathers, probably. Certainly not to make the world safe for Democracy, or any rhetoric of that sort. When I was doing stretcher work, I had to tell myself over and over that nothing would come of it, but that it had to be. Sometimes, though, I think something must. . . . Nothing we expect, but something unforeseen." (p. 348)
>
> (「1917年には、僕は24歳になっていて、もう銃を取ることが出来た。戦争は我々の世代にのしかかってきた。何故であるか、僕には分からないが、恐らく、我々の先祖の罪からだろう。確かなことは、世界をデモクラシーに対する危害から守る為とか何とかの為ではない。僕が担架で傷ついた兵隊たちを運んでいる時、繰り返し繰り返し、自分に言って聞かせたことは、この戦争からは何も得ることが出来ないであろう、しかし、どうしても起こらざるを得なかったのだと。だが、僕は時々思うんだ……何か未来のことは予測できないが、何か今まで思いもつかなかったようなことが起こるに違いない。」)

ゲルハルトは美の世界に憧れ、若くしてフランスに留学した知的な青年であり、「理想主義者」のクロードが「無条件に尊敬できる人物、彼が憧れ、そうありたいと思う人物」(p. 350) である。二人は共にアメリカ遠征軍の中尉であり、また無二の親友ではあるが、しかし、ゲルハルトの戦争観と時間観はクロードとは全く相異なるものである。というのも、ゲルハルトにとって、時間は第一次大戦の勃発を境に「創造の媒体」から「破壊」へと一変したからである。先ず第一に、彼が徴兵されたのはフランス留学から一時帰国し、将来を嘱望された音楽家として母国で活躍中の時であり、次に、パリの国立音楽学校で共に学んだフランス人の親友、ルネ・フレーリを殺したのは第一次大戦である。入隊前のゲルハルトが軍の車で演奏会に出掛ける途中、彼の乗った車が酔っ払いのタクシに衝突され、名器のヴァイオリンが滅茶滅茶に壊れるが、この交通事故こそ第一次大戦が美の世界にとって、如何に致命的であったかを具象的かつ象徴的に示す証左である。第一次大戦が最新の凶器（機械）を用いて戦われた、史上最大の戦争であったことは断るまでもあるまい。ゲルハルトはクロードに「あの交通事故に遭遇して以来、僕は大変多くの美しい、古い物が破壊されていくのをこの目で見てきた……それで僕は運命論者になってしまった」(p. 347) と述べている。

ゲルハルトとクロードは軍人としては対等であるが、しかし、二人の生きた過去の世界は全く対照的である。従って、ゲルハルトが華やかな過去の世界を背景に、悲観的な戦争観と時間観を開陳すればする程、クロードの意識が最終的に収斂してゆくのは、戦友と比べて余りにも惨めな己の過去の姿である。下記の引用文はクロードがゲルハルトの過去の世界を知った後で見る夢の内容であるが、それは無様な敗北者であった〈過去の自己〉とその自己が生きた空間が、「栄光への脱出」を果たした後ですらも、彼の深層意識の中で如何に大きな比重を占めているかを明確に示すものである。

> One night he dreamed that he was at home; out in the ploughed fields, where he could see nothing but the furrowed brown earth, stretching from horizon to horizon. Up and down it moved a boy, with a plough and two horses. At first he thought it was his brother Ralph; but on coming nearer, he saw it was himself, — he was full of fear for this boy. Poor Claude, he would never, never get away; he was going to miss everything! While he was struggling to speak to Claude, and warn him, he awoke. (pp. 349−350)
>
> （ある晩、彼は故郷に居る夢を見た。外の耕された畠で、地平線から地平線まで、何処までも伸びている鋤をいれた赤褐色の大地以外は何も見えなかった。その大地に見え隠れして、二頭の馬に鋤を引かせた一人の若者が動いている。初めの内は、それは弟のラルフだとばかり思っていたが、段々近付いて来るのを見ると、それが自分であることが分かった —— しかし、この若者が怖くてたまらなかった。哀れなクロードよ、お前は決して、決して、そこから逃げ出すことは出来ないであろう、お前は何事にも成功することはないであろう！彼が夢の中でクロードに話しかけ、忠告しようと必死に焦っている時に、目が覚めた。）

この闇の世界から人生に絶望したクロードを救い出し、彼を憧れの異国の地でアメリカ遠征軍を指揮する輝かしい英雄へと変身させたのは第一次大戦であり、加えて、彼を虜にした母性的な女性たち、ジュベール夫人もまたオリーヴ嬢も共に戦争の傷跡を秘め、彼女たちの最大の願いはフランスの勝利である。従って、ジュベール夫人宅で予定の休暇を終えたクロードが、牧歌的な田園の世界に別れを告げて、砲撃と戦闘の世界に近付けば近付く程、心理的に〈聖戦の勇者〉へと変貌してゆくのは自明である。そして、その過程の中で、故郷の男の世界の醜さを改めて思い見る時、彼の心の中で第一次大戦は国と国との戦いから、理想主義と物質主義の戦いへと変質してゆくのである。具体的に見てみよう。

第七に、ジュベール夫人宅を辞したクロードとゲルハルトが、前線に復帰する前に、最後の休暇を過ごすのがフレーリ夫人宅である。この夫人の長男で、第一次大戦で戦死したルネは、ゲルハルトの親しい旧友であったからである。フレーリ家はフランスの上流階級に属し、家族（夫人、娘のクレール、末っ子のルシアン）は、パリの国立音楽学校で学んだ長兄と同様、美を愛する洗練された人々である。この母子家庭の中心的人物は母性的なフレーリ夫人であり、彼女もまた戦禍に苦しむ女性の一人である。「ルネの国立音楽学校や軍隊での友人たちのことなどについて、あたかも彼が未だ生きてでもいるかのように、母と娘は語り続けるのであった」(p. 353) というクロードの観察は、その一つの証左である。にもかかわらず、この家に足を踏み入れたクロードが真っ先に感じるのは「惨めな気持ち」(p. 353) である。というのも、彼はゲルハルトの過去の舞台の華やかさに圧倒され、否応なく、己の出自の惨めさを痛感せざるを得ないからである。その気持ちが頂点に達するのは、軍人に変身する以前のゲルハルトの姿（フランスで学んだ輝かしい音楽家）を見せ付けられた時である。というのも、ゲルハルトはルシアンとクレール嬢の要請に負けて、ルネの形

見のヴァイオリンを弾かざるを得ないはめとなったからである。ルネのヴァイオリンはアマティという大変な名器とのことであるが、無知なのはクロードのみである。過去の姿に戻ったゲルハルトの前では、所詮クロードは「粗野で不器用な（ネブラスカの）農業青年」でしかないのである。それを彼に思い知らせるのが、ゲルハルトの演奏が始まった時である。

The music was apart of his own confused emotions. He was torn between generous admiration, and bitter, bitter envy. What would it mean to be able to do anything as well as that, to have a hand capable of delicacy and precision and power? If he had been taught to do anything at all, he would not be sitting here tonight a wooden thing amongst living people. He felt that a man might have been made of him, but nobody taken the trouble to do it; tongue-tied, foot-tied, hand-tied. If one were born into this world like a bear cub or a bull calf, one could only paw and upset things; break and destroy all one's life. (pp. 354－356)

（流れてくる音楽そのものが彼の葛藤する感情と係わりがあった。彼は惜しみない賛嘆と激しい妬みの相克に苦しんでいた。あのように立派に事が出来るということ、あのように繊細な、そして精確で力強い音色を出せる手を持つということは、どういうことなのであろう？もし自分が苟も何か出来るように教え込まれていたら、今晩ここで木偶の棒のようにしていることはないであろう。自分だって立派な一人前の男になれたろうが、誰も引っ張り上げてはくれなかった。だから今は、上手く喋れず、手も足もでない、がんじがらめにされているような状態だ。もし人が熊や牛の子のように、この世に生まれてきたとすれば、人は一生涯の間、ただ物を足でつついたり、ひっくり返したり、壊したり、押し潰したりすることが出来るだけだ。）

たとえ旧知の間柄とはいえ、いとも易々とフレーリ家に融け込み、しかも、見事にヴァイオリンを弾きこなしている戦友のゲルハルト。その眩しい後ろ姿を見て、「惜しみない賛嘆と激しい妬みとの相克」に苦しめば苦しむ程、クロードの思いが最終的に収斂してゆくのは、自分が生まれ育った、美とは無縁の故郷の世界、つまり、マモンの神と機械を崇め、文化的には不毛の砂漠でしかない醜い男の世界である。そして、フランスに魅せられ、その戦禍を知った後で、故郷の不毛を恨み、その男の世界の醜悪さを心の中で反芻すればする程、敵軍の男の世界は、故郷の男の世界、中でも、取り分け醜悪なベイリスの世界へと、そのイメージを変えて行くのである。言い換えれば、第一次大戦は、もはや国と国との戦いではなく、物質主義と理想主義の戦いとなるのである。ここに至って初めて、「理想主義者」のクロードは、己の命を賭けるに最も相応しい「大義」(p. 389) を発見するのである。だからこそ、フレーリ夫人の庭で遠くの方から聞こえてくる大砲の音を聞いて、悲観的な戦争観を述べるゲルハルトに対して、クロードは「悲観的に見るのは君のような人間たちだよ……僕は今度の戦争が始まる迄、その為に命を燃やすような何かがあるとは全然知らなかった。それ以前の世の中は商売の取り引きのように見えた」(p. 356) と反駁したのである。クロードにとって、第一次大戦は理想主義の存亡を賭けた一大聖戦であり、しかも、彼は「理想というものは、ただ美しく無気力な古めかしいものではなく、人間の真の力の源泉である」(p. 357) と悟ったばかりである。だからこそ、クロードは理想主義の最終的な勝利を確信することが出来るのである。遠くで轟く砲撃の音を聞きながら、フレーリ夫人の家で眠りに落ちる前に、この「理想主義者」が述懐した心の思いについて、語り手は次のように述べている。

No battle-field or shattered country he had seen was as ugly as this world would be if men like his brother Bayliss controlled it altogether. Until the war broke out, he had supposed they did control it; his boyhood had been clouded and

enervated by that belief. The Prussians had believed it, too, apparently. But the event had shown that there were a great many people left who cared about something else. . . . The sound of the guns had from the first been pleasant to him, had given him a feeling of confidence and safety; tonight he knew why. What they said was, that men could still die for an idea; would burn all they had made to keep their dreams. He knew the future of the world was safe; the careful planners would never be able to put it into a strait-jacket, —— cunning and prudence would never have it to themselves. (p. 357)

（どんな戦場であろうと、彼が今までに見たどんなに破壊された土地であろうと、もし彼の兄ベイリスのような人間たちによって牛耳られた場合の世界ほど醜くはない。戦争が始まる迄は、そういう人間たちが、この世界を牛耳っていると彼は思っていた —— そして、彼の青春時代は、その思いで暗く精気がなかった。ドイツ人たちも同じ思いを持っていたのかもしれない。しかし、物質的、実利的でない考え方をする人たちが、まだまだ大勢いることを、この戦争が教えてくれた……大砲の響きは、今もなお人間は一つの理念の為に死に得るということ、そしてまた、人間はその夢を保ち続ける為に、今まで作り上げた全てをも焼き尽くすこともあるということを語っていた。彼は世界の将来に不安はないと思った。どんな策略家も世界をがんじがらめにすることは出来ないであろう。世界が奸知と策謀の手に落ちることはないであろう。）

第一次大戦を物質主義と理想主義の一大聖戦と捉え、理想主義の勝利を確信するのはクロードであるが、一方ゲルハルトは、つまり、クロードが「無条件に尊敬できる人物、彼が憧れ、そうありたいと思う人物」は、彼に「（この戦争によって）時間よりも、もっと大事なものを失ってしまった」(p. 346) と述べている。言い換えれば、クロードは〈幻想の世界〉に生きる徹底した時間の肯定者であるのに対して、作者の代弁者は正にその逆である。ここで、前者のモデルがネブラスカ出身のキャザーの従弟であり、後者が『私のアントニーア』の語り手ジム・バーデンのように、広い世界と時間の意味を知る知的な人物であることを思う時、クロードとは作者が故郷のネブラスカに残してきた彼女自身の分身であり、一方ゲルハルトはネブラスカを出た後の作者の分身であると言えよう。ここに、クロードに対するキャザーの深い同情と哀れみに満ちた慈愛がある。憧れの異国を舞台とするクロードの意識のドラマに於て、彼が最後の最後まで、幻想の世界に生きる幸福な主役を演じることが出来たのは、その何よりの証左である。換言すれば、クロードは大戦が終了する前に、愛するフランスの地で、理想主義の勝利を確信する聖戦の英雄として死ななければならないのである。

フレーリ夫人宅を出たクロードとゲルハルトが大隊に合流するのは1918年９月20日であり、二人が戦死するのは翌10月初旬の同日である。先ず第一に、共に死地に赴く前に、クロードは「これまで見てきた限りでは、僕はこの国の女性が好きだ」(p. 374) とゲルハルトに明言し、その直ぐ後で、フランスに上陸した日に彼の心を奪った感動的な光景、月光の中で傷心のアメリカ兵をいたわる献身的なフランス娘の姿を回想しているが、彼はフランスの母性的な女の世界に触れて初めて、故郷の男の世界で被った心の傷から立ち直ることが出来たのである。次に、クロードに致命的な敵弾が命中するのは、多勢に無勢の中で、「素晴らしい部下」を指揮して獅子奮迅の活躍をしている時であるが、死を覚悟した彼の胸中に去来するのは「我々は死ぬだろうが、しかし、我々は断じて負けない」(p. 386) という思いである。クロードは紛れもなく〈聖戦の英雄〉として、しかも、ゲルハルト、「もしデェイヴィッドが生きて戻ることが出来るなら、このクロードが我身を犠牲に捧げます」(p. 383) と神に祈りを捧げた無二の戦友が、自分よりも先に壮烈な戦死を遂げた悲劇

については何も知らされずに、微笑みを浮かべて死んでゆくのである。

(Ⅶ)

さて、哀れみと同情を禁じ得ない自己の分身が物語の舞台から消えた以上、作者に残された問題はゲルハルトの戦争観と時間観の究極的な正しさを白日の下に曝すことである。風刺小説としての『我らの一人』の心髄は、本書のエピローグとも言うべき第19章にあり、その内容はクロードの母親の意識のドラマを通して、第一次大戦後のアメリカ社会に対する作者の幻滅と絶望を描くものである。フランスから次から次へと届くクロードの手紙を読みながら、アメリカ社会の現実を正視すればする程、彼の母は幻想の世界で〈聖戦の英雄〉として死んだ息子の死を、神に感謝せざるを得ないのである。語り手は「彼は自分の祖国が実際よりも良い国だと信じ、またフランスが如何なる国よりも素晴らしいと信じつつ、死んでいったのである。これらは死んで行く者たちの信念としては、美しいものであった。そういう幻影を抱いたまま死に赴き、醜い現実を見ない方がいいのかもしれない。彼女はクロードが目を覚まして、この醜い現実を知るのを恐れた。もし彼が目覚めたとしたら、この荒涼とした絶望感はとても耐えられなかっただろうと彼女は思った」(p. 390) と述べている。

戦後の「醜い現実」の故に、最愛の息子の死を喜ぶ母親。ここに、第一次大戦後のアメリカ社会に対する作者の告発と痛烈な風刺が込められているのは自明の理である。というのも、「この戦争の後で、幅をきかせているのは邪悪のみ」(p. 389) であり、クロードと同じような大戦の英雄たちが、帰国後、全米の各地で次から次へと自殺していったからである。クロードの母親は「これらの自殺者は全て息子に大変よく似ている……彼らは、彼らの期待や信念が余りにも大きかったことに気づいて、自らの命を断っていったのである」(p. 390) と述懐しているが、この言葉こそ大戦後のアメリカ社会が〈ネブラスカの醜い男の世界〉そのものに変貌してしまったことを端的に示すものである。換言すれば、第一次大戦後のアメリカ社会には、時間の意義は皆無であり、従って、精神の開拓者として生きることは、もはや完全に不可能となったのである。とするなら、人はこの世で如何に生きるべきか。この深刻な問題に直面した時、キャザーは五十に近い孤独な老嬢であり、しかも、彼女は時間に捉われ続けてきた作家である。従って、上記の悲劇的な時間観の行き着く先は、〈究極的な救い〉の問題となる。本書の最後を飾るのは、次の文章である。

> As they are working at the table or bending over the oven, something reminds them of him, and they think of him together, like one person: Mahailey will pat her back and say, " Never you mind, Mudder; you'll see your boy up yonder." Mrs. Wheeler always feels that God is near, — but Mahailey is not troubled by any knowledge of interstellar spaces, and for her He is nearer still, — directly overhead, not so very far above the kitchen stove. (pp. 390−391)
>
> (二人が食卓の用意をしていたり、かまどに向かっていたりする時など、ひょっとしたことが今は亡きクロードのことを思い起こさせ、二人はまるで一人の人間のように、共にクロードのことを偲ぶのであった。こういう時、マヘイリーは静かに夫人の肩を叩いて言うのである。「気にしなさるな、マダー、クロードさんは天国にいなさるだ。」ウィーラー夫人は、このところ何時も神が天国から身近に自分を見下ろしておられるのを感ずるのである。しかし、マヘイリーにとっては、空間の距離などということは問題外である。彼女にとって、神は最も身近な所 —— 台所のかまどの直ぐ上のあたりにもおられるのであった。)

先ず第一に、作者のウィラ・キャザーにとって、第一次大戦を理想主義と物質主義の一大聖戦と信じた「理想主義者」のクロード・ウィーラーが、最終的には「愚者」[39] であることは否めない事実である。とはいえ、この純朴な「理想主義者」を幻想の世界に追い詰めた最大の要因は、つまる

ところ、ネブラスカの醜い男の世界であり、クロードは、言ってみれば、その醜い男の世界の哀れな犠牲者である。従って、彼の郷里を舞台とする本書の最終場面に登場するのは、「まるで一人の人間のように、共にクロードのことを偲ぶ」母親のイヴァンジェリンと手伝い女のマヘイリーのみである。この母性的な女性たちが生きている限り、クロードもまた彼女たちの心の中で幸福に生き続けることが出来るのである。次に、この二人の女性が共に神に結び付けられているのは、絶望的な時間観の逆転の故に、否応なく、究極的な救いという極めて宗教的な問題を意識せざるを得なくなった作者の内面的変化を示すものである。第三に、マヘイリーが神の存在を最も身近に感ずる人物として描かれているのは、この知恵遅れの善女が神に祝福された人間であることを示すものである。というのも、彼女は「心の貧しい者」、「悲しむ者」、「柔和な者」、「哀れみ深い者」、「心の清い者」、「平和を作る者」[40] であり、「幼子のように自分を低くする者」[41] であるからである。世俗的な価値観を逆転させるのは、言うまでもなく、信仰の世界である。語り手は「マヘイリーは若い頃には随分と苦労したものである —— 野蛮な山育ちの男と結婚したが、この男は彼女を酷使し、全く生活の糧を与えなかった。彼女は丸太小屋の中で、空になった穀物樽と冷え切った鉄の鍋の側に坐って、〈あの人〉が射止めたリスか盗んだ鶏をもって帰るのを待っていた頃を覚えている。しかし往々にして、夫はただ山ウィスキーの一瓶を持って帰るだけで、しかも、彼女に冷酷に拳骨を振り回すのであった。彼女は今は仕合せだと思うのである —— 食べ物を乞うたり、薪を集めに森へ入って行く必要もなく、暖かいベッドも、履く靴も、まともに着る物も保証されているからである」(p. 21) と述べている。マヘイリーは「花のない人生」[42] を従順に生きる薄幸の女性であるが、時間の正体が「破壊」であるとするなら、この知恵遅れの善女こそ神に祝福された人物であるというのも首肯できることである。というのも、彼女は時間を積極的に肯定するエロス的な生き方とは全く無縁の世界に属する人間であるからである。マヘイリーは、人生に迷った『大司教に死は来る』(1927) の主人公、大司教のラトゥールを精神的に〈再生〉させるメキシコ人の奴隷女、サーダに繋がる女性であり、その意味で彼女もまた紛れもなく母性的な女性の一人であると言えよう。

アレグザンドラ、アントニーア、マヘイリー、オーガスタ、サーダと見てくれば、キャザーが終生母性的な女性を讃え続けたことは確かであるが、しかし、本小説を境に、その母性賛美の力点はエロスの世界からアガペーの世界へと移り、その行き着く先は聖母マリアの賛美となる。〈醜い男の世界〉の台頭によって、開拓者世界の敗北と崩壊を思い知らされた開拓者作家のキャザーが、現実の生に対する絶望感を深めて行くにつれて、次第にカトリシズムの世界に傾斜してゆくのは、その確かな証左である。というのも、カトリシズムこそは徹底的に聖母を賛美し、崇拝する唯一の宗教であるからである。時間に捉われ、母性を賛美する独身女流作家のキャザーが人生の黄昏を迎えて、徹底的に時間に幻滅した時、彼女を究極的に救えるものは、時間を越える唯一の母性的な女性、聖母のマリア以外に存在しないのは自明の理である。『我らの一人』を出発点とする1920年代の彼女の文学の展開は、この事実を明白に示していると言えよう。

注

1. Willa Cather, "Prefatory Note" of *Not Under Forty* (1636; New York: Alfred A Knopf, 1971). 第一次大戦後のアメリカの社会情勢については、F. L. アレン著、藤久ミネ訳、『オンリ・イェスタデイ』(ちくま文庫、1993) を参照。第一と第二は著者の言葉であり、第三は解説者の吉見俊哉氏の言葉である。(1) 「〈われわれはドイツ人をやっつけた。今度はいまわしいボルシェヴィストをやっつけよう。そして、ウィルソンと彼のひきいる平和主義者の一党を追放するのだ〉。戦争の緊張はゆるんできていた。理想主義のシャボン玉は、ちょっと針でつつかれただけで破れてしまった。平和になって最初の数週間がすぎると、合衆国は、はたしてウッドロー・ウイルソンが考えたように［全世界に真の民主主義が樹立されるように力をかす］準備をととのえているのかどうか、疑わしくなってきた」。(p. 44) (2) 「新しい道徳律は戦後の幻滅感のなかか

ら生まれた。だから、新しいモラルの代表者たちのから威張りや新時代の到来を告げることばの底には、やはり根強い幻滅感がただよっていた。もし、この〈第一次大戦後の〉十年間を無作法な時代というならば、それは同時に不幸な時代ともいわねばなるまい。人生に意味を与え豊かにしていた価値体系は、古い秩序とともに失われ、それに代わる価値は容易に見つからなかった」。(p. 166) (3)「1920年代、アメリカ人の日常生活は根底から変容する……ラジオや新聞、雑誌などのマス・メディアの発達と大衆的浸透は、この国に住む膨大な人々の意識を、きわめて広い範囲で日常的に混ぜ合わせていった。こうした意識の撹拌には、自動車の普及がいっそう直接的に作用したであろう。人々は、これらの情報と移動のメディアによって、それまでよりもはるかに容易に伝統的な共同体の規範から抜け出していった。もはやどれほど保守的な道徳家たちがひなんしようとも、すでに壁は突破されていたのである」。(pp. 486−491)

2. See Part 1 of David Stouck, *Willa Cather's Imagination* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1975).

3. Elizabeth Shepley Sergeant, *Willa Cather a Memoir* (1953; Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1967), p. 121.

4. Cf. Willa Cather, "Novel Demeuble," of *Not Under Forty*, pp. 48−49: "The higher process of art are all processes of simplification."

5. *One of Ours* を失敗作と酷評した主な人々は Sinclair Lewis, Mencken, Heywood Broun, Ernest Hemingway 等である。See James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1987), pp. 333−334.

6. Dorothy Tuck McFarland, *Willa Cather* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1972), p. 53.

7. Woodress, *Willa*, pp. 303−304.

8. Edith Lewis, *Willa Cather Living* (1953; Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1976), p. 117.

9. Page references in this paper are to *One of Ours* (1922; New York: Vintage Books, 1971). 和訳は一部を除いて福井吾一訳、『我らの一人』(成美堂、昭和58年) によるものである。

10. Henri Bergson, *Matter and Memory*, trans. N. M. Paul and W. S. Palmer (New York: Zone Books, 1988), p. 153.

11. Cf. Alfred Kazin, *On Native Ground: An Interpretation of Modern American Literature* (New York: Harcourt, Brace & World, 1942), p. 255: "He is not merely the scholar as artist, the son of pioneer parents who has carried the pioneer passion into the world of art and thought; he is what Willa Cather herself has always been and hoped to be — a pioneer in mind, a Catholic by instinct, French by inclination, a spiritual aristocrat with democratic manners."

12. Willa Cather, *The Professor's House* (1925; New York: Vintage Books), p. 258.

13. Matthews 5: 5

14. キャザーは財も門地もない西部移住者の子供(7人兄弟の最年長者)である。にもかかわらず、今よりも遥かに男性主導の時代と社会の中で、彼女は若くして「アメリカの夢」に捉われ、しかも、一度ならず二度までも「目の眩むような成功」を手に入れ、最終的にはアメリカ最大の女流作家となった非凡な女性である。従って、先ず第一に、ネブラスカの田舎娘である彼女が保守的な東部社会の中で、とにもかくにも、「成功の夢」を果たす為には、その意識の深層に於て、女ではなくファウスト的な男として生きなければならなかったことだけは確かである。彼女が生涯独身を貫き、彼女の分身を兼ねる作中人物の殆ど全てが男性であるのは、その何よりの証左である。次に、彼女が東部の大都市ニューヨークで念願の成功を果たしたのは三十の半ばであり、しかも、その成功が結果的には「パラドックス」そのものであることを痛感したからこそ、故郷の辺境の地(ディヴァイド)で豊かな〈生〉の創造に生きた母なる女性を賛美する作家に転進したのである。換言すれば、キャザー文学の顕著な特質である分身の性の倒錯と性愛忌避と母性賛美は、彼女が女であることを徹底的に抑圧して生きたことの証であると言えよう。彼女が如何に「男性的要素」を秘めた女性であろうと、彼女の文学に秘められた上記の特質は女であることに背を向けて生きざるを得なかった彼女の心の傷跡を明確に示していることだけは確かである。

15. See Woodress, *Willa*, pp. 303−304.

16. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North Holland, 1974), p. 504.
17. *Loc. cit.*
18. Willa Cather, *The Professor's House*, p. 265.
19. Vries, *Dictionary*, p. 437.
20. Cf. Lewis, Willa, p. 137: "*The Professor's House* is, I think, the most personal of Willa Cather's novels — and for that cause, no doubt, is given a more symbolic expression than her other stories."
21. Willa Cather, *The Professor's House*, pp. 26−27.
22. *Ibid.*, p. 29.
23. Willa Cather, *My Mortal Enemy* (1926; New York: Alfred A Knopf, 1972), p. 112.
24. Woodress, *Willa Cather*, p. 337.
25. 拙稿「ウィラ・キャザーの開拓者小説における男性像について」、『中・四国アメリカ文学研究』第24巻参照。
26. 伝道の書 1: 4-7.
27. See "Introduction" by Bernice Slote *in Alexander's Bridge* (1912; Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1977), p. xviii and *The Kingdom of Art: Willa Cather's First Principles and Critical Statements, 1893-1896* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1966), pp. 97−103.
28. 生涯独身を貫いたキャザーにとって、性愛願望は抑圧の対象であり、従って、性愛忌避は彼女の文学に秘められた一つの顕著な特徴である。とはいえ、性愛が実り豊かな〈生〉の創造に結び付く時、それは彼女の積極的な肯定の対象であることを指摘しておく。それはネブラスカ大学出版部の商標として採用されている『私のアントニーア』の有名な場面、大地（女性の象徴）と鋤（男根の象徴）の取り合わせを見ても明らかである。
29. 伝道の書 1: 2−3.
30. See Woodress, *Willa Cather*, p. 303.
31. 高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店、1981）、41頁参照。
32. See "By the Seaside" in Samuel Longfellow, ed., *The Political Works of Henry Wadsworth Longfellow*, 1 (New York: Ams Press, 1966), p. 257: "Thou, too, sail on, O Ship of State!／Sail on, O Union, strong and great!／Humanity with all its fears, ／With all the hopes of future years, ／Is hanging breathless on thy fate!"
33. Cather, *Alexander's Bridge* p. 40.
34. Cf. Norman O. Brown, *Life against Death: The Psychoanalytical Meaning of History* (Middleton: Wesleyan Univ. Press, 1985), p. 45: "Eros is fundamentally narcissistic, self-loving."
35. See Woodress, *Willa*, p. 328.
36. Cf. (1) Merrill Maguire Skaggs, *After the World Broke in Two: The Later Novels of Willa Cather* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1990), p. 40: "The central fact about One of Ours that one must see in order to read it intelligently at all is that the book is bathed and saturated in irony. The fact that Cather must have found intolerable about the critical response to the work is that her best friends, such as Elizabeth Shepley Sergeant, and best literary colleagues, such as Mencken and Nathan, missed her irony." (2) James Woodress, *Willa*, pp. 333-334: "It seems in retrospect that no reviewer read the novel with an open mind. It would have been impossible to do so in 1922 when the war was still a hot political issue, and the reviews were more or less shaped by the reviewer's attitude towards the war. Broun was frank enough to admit that his prejudices probably influenced his judgment, and in a subsequent column in the *New Work World* he printed a letter from a veteran who said: 'I stick with you in your prejudices, but I don't think you gave the book a fair deal.' It seems clear that the hostile reviewers wanted a protagonist who experienced boredom and disillusionment in his military service and lived to criticize the society that had sent him to war."

37. マヘイリーとフォイクトの母性的特性については、次の文を参照。(1)「マヘイリーは男たち —— ダンを絶対に男の一人に数えなかったが —— が腹一杯食べるのを見るのが好きであった」(p. 83) (2)「〈私にゃ自分の息子がいないので、あの人たちに特別おいしい料理をつくってあげたいんですよ。〉フォイクトは、ずんぐりした両手をエプロンの下で揉みながら立っていた。そして、あたかも自分自身が味わってでもいるかのようにじーっと、彼の食べる一口一口を見守っていた」(p. 33)。
38. 馬杉宗男、『大聖堂のコスモロジー 中世の聖なる空間を読む』(講談社：1992)、pp. 108－109 参照。
39. James Woodress, *Willa*, p. 328.
40. Matthews 5: 3－9
41. Matthews 18: 4
42. Willa Cather, *The Professor's House*, p. 280.

平成6(1994)年9月1日受理
平成6(1994)年12月26日発行